

秋田縣に入ると、平鹿郡横手の町のネブリ流しが先づ有名である。是は舊曆七月六日の夜、藁で作つた二間ばかりの舟に、満船蠟燭を點したのを各町から出し、それに此土地ではネブタの木と謂ふ合歡木か又は竹へ、短冊形の色紙と燈籠とを附けたのを持つた青年が多く附添うて、旭川の川原まで持出し、花火を揚げたり色々と景氣をつけた後に、川へ流すのである。近郷近在より多數の見物人集まり來り、その賑かさ十六日の送盆に次ぐとある(横手郷土史)。即ちこの土地では盆の後先に、兩度の燈籠送りをして居るのである。

それから仙北郡には大曲のネムリ流しがある(月の出羽路九)。生保内村おぼないのネブタ流しは、入込んだ山寄りの村だけに、其行事がずつと質素で、竿燈などいふ飾り物は無い。日は一定せぬらしいがほど同じ頃と思はれる。ちやうど麻剝きの作業期に入つて、夜分睡たくなつて困るのを、何かネブタといふものが居て憑くやうに思つて居たので、それを流す爲に此行事があつた。今はたゞ簡単に酒食を携へて川の邊へ行き、飲み食ひ歌ひ楽しむだけになつて居るが、それでも其折に唱へる言葉は、

ネブタなんがれる、豆の葉とんまれ

といふのがあつた(郷土研究七卷七號)。以前は此際にイボタの木の葉を以て、頭から眼顔胸を擦り、それを川に流したといふ説もあるが(同上六卷二號)、是も必ず方言ネブタ、即ち合歡の木を用ゐたもので、イボタといふのは誤りだらうと思ふ。

町と村落と、一つの行事の花々しさの度のちがふ理由は、誰にでも容易に推測し得ることである。假にこの習俗が起りの遠いものならば、湊や城下町で始まつた氣遣ひは無く、即ち今ある形は後々の發達でなくてはならぬのだが、妙に此點だけは御國自慢の人が取りちがへて居る。古いと言ひながら今の姿によつて、其由來を説明したがる者がまだ多いのである。秋田縣などは村々の眠流しが、町とは非常に變つて居てしかも久しく保存せられて居た。さうして秋田市の所謂竿燈などは、既に百數十年前から、今のやうに盛んなものであつた。長い竹に數本の横木を渡し、是に大いなる燈籠四十五をぶらさげる。多力の者を選んで一人で持たせ、三四人の手代りが附添うてあるいたといふから、或は新潟の

夜七夕よりも壯大だつたかと思ふ。是が此城下の眠流しなのだが、流す以前は町々を練り廻つて、華美を競ふのを主として居たやうに見える。能代湊の眠流しは、殊に目ざましいものであつたといふ。高さは三丈四丈、横幅は二丈、屋形人形さまざまの巧みを盡し、蠟を引いた紙で五彩を色どり、年々新を争うて入費を惜まなかつた。しかも是と同時代に行はれて居た村々の眠流しの方は、たゞ單に麻稈をめい／＼の齡の數だけ折つて、草のかづらでからげ、それを枕の下に敷いて寝て、七日の朝早く川へ流すだけの行事をさう呼んで居たのである（秋田風俗問答）。

こゝで我々の注意を引くのは、同じ仙北郡でも二つの土地で、ネムリ流しともネブタ流しとも謂つて居ることである。鹿角郡も南部の宮川村などはネムリ流しと謂ひ（民俗學二卷七號）、北の毛馬内ではネブタと呼んで居る。双方同じといふことは土地／＼でも知つて居たらうが、どちらが前からあるかは一寸決しかねる。私の想像では、ネブタといふ語が名詞として用ゐられるには、單なる思ひ付きといふ以上に、そこに一つの心理過程が介

在する。即ち人を苦しませるネブタと謂ふもの、睡魔とまでは言ひ得なくとも何か流して離れてしまへるものがあるやうに考へたのが元だつたらしく、合歡木をネブタといふ方言は、恐らくは先づ來て之を助けたのである。そのネブタの木といふ方言は區域がずつと廣く、此木の枝を流す風習も亦、ネブタ流しといふ土地よりも廣いから自分はさう思ふ。

それから今一つ重要だと思ふことは、同じ南秋田のうちでも男鹿半島まで行くと、既にネブリ流しの期日が異なつて居ることである。たとへば八郎瀨に寄つた脇元村などで、同じ名を以て呼んでゐるのは、盆の十六日の佛送りのことで、此夕は胡瓜と茄子の馬に、例の通り佛様の荷物といふ食品を負はせ、それに寺から受けて來た札、即ちほとけ様を結び付け、火を焚き太鼓を叩いて村内の一地まで送つて行く。それがこの土地のネブリ流しである。七日には七回赤飯を食べ七度水を浴びるといふ習はしもあり、宵には又子供たちが燈籠を持つてあるくが、此方にはさういふ名が無いといふ（寒風山麓農民手記）。眠流しの最初の趣意が、魂送りや聖靈舟のそれと、本來同じであつた一つの證據では無いかと私は思

つて居るが、是だけではまだ多くの人の同意は得難いであらう。

五

青森縣各地のネプタ流しに就いては、すつと以前に、自分も書いたことがあり(郷土研究二卷五號)、又それから以後益々全国的に著名になつて來たから、もう詳しく之を記述する必要も無いが、ほんの二三の要點と思ふ所を揚げて置くと、先づ第一に現在の大きな町のネプタは、信州あたりの眠流しと比べて、どこに一つの似た所も無いほどちがつて居る。殊に電線が邪魔になる位な巨大な紙張りの人形を作り、それを日中から擔ぎまはるなどは秋田能代にも新潟にも字都宮にも無いことである。しかも此行事は相應に古くからあつたといふのだから、以前も此通りの著しい異色を具へて居た如く、速断する人が無いとは限らぬが、張子の人形だけは少なくともごく近世の發達のやうで、其前はやはり夜分を主とした大燈籠であつた。所謂人形ネプタの目ざましい發達は、今純三君が精細に其過程を説

いて居るが(民俗藝術一卷一號)、それに附加へて、晝間も人に見せようといふ念慮が無かつたら、斯くまでの工夫と金とは費さなかつたのである。而うして其結果は又之を海に流す七日目よりも、却つて其前の六日間を、重んずる傾向を強くしたのである。燈籠の製作は、紙の民間普及より早い氣づかひは無い。京都や奈良でこそ既に足利期の末頃から、珍らしい形の盆燈籠の、貴人の間に賞翫せられたことが見えて居るが、それを地方に住む者が利用し得たのは、又大分後のことでなくてはならぬ。津輕年代記の元龜元年の條に、流火燒諸人見物とあるのは、單に此地方の流火行事が、もうあの頃から七月七日であつたといふ證になるだけで、其火は松の火でも藁炬火でもすむ。現に今日も尙それですませて居る地方は多いのである。それから愈々蠟燭が自由に求められるやうになつても、ネプタはまだ暫くの間はたゞの四角の燈籠であつた。たとへば寛政五年の外南部の大畑のネプタ流しは『牧の朝露』といふ紀行に「六七尺一丈ばかりの竿のさきに、彩畫かいたる方なる火ともしに七夕祭と記して、そが上に小笹芒などさし重ね云々」とある。是はまだ僻地だ

から眞似得られなかつたとも見られるが、是と大よそ同じ頃の奥民圖彙といふ見聞録の、弘前城下のネブタ祭記事にも「萬燈は四角、上に風流を附く、青森にて見たるものと稍同じからず」とあるのみで、扇とか金魚とかいふ最も平凡なるものも、まだ出來て居た様子が無く、まして大々的な人形の細工などは、全く其後數十年の間に、次第に新奇を好んで考案せられたものしか見えぬのである。此程度の燈籠ならば、秋田にも又新潟にもあつた。其上に人形は亦別に此日を以て海に送り流す習俗があつたらしいのだから、是を燈籠の風流即ち飾り物に、技巧が許すならば利用しようとする。動機は初めから潜んで居たので、たゞ此地方の如く發展して來た事實だけが特異なのである。

六

次に今まで青森縣の人が、知らずに居たらしい他の土地との一致は、たゞに名稱と七月七日の早曉に海へ流すといふ、二點だけでないことを述べなければならぬ。現在なほ行は

れて居る群衆の唱へ詞、

ネブタは流れろ、まめの葉はとゞまれ

といふなども又其一つで、是が各地の偶合といふことは有り得ぬは勿論、たつた是ばかりをよそから採用して、其他は獨創といふことも亦想像し難く、しかも寛政中頃の奥民圖彙時代、即ち弘前でまだ四角な萬燈を擔ぎまはつて居た頃から、既に全く同じ文句であつたのである。土地によつての僅かづゝの相異は前からもあつた。たとへば下北半島の大畑では

ネブタも流れろ、豆の葉もとゞまれ、

芋がらく

と唱へてゐたが、この終りの句の芋がらくは、或は南秋田などの、前夜枕の下に敷いて寝た麻殻を、翌朝川へ流す風習と關係があるので無いかと『牧の朝露』には言つて居る。近年の例としては北津輕の小泊邊に、

ネブタ流れる、蓮の葉も流れる

といふのは(旅と傳説四卷八號)、注意すべき變化だと私は思ふ。それから又東津輕の野内など、

ネブタこながえろ、まづの葉とつばれ、

ださばだせよ

と謂つて居るなども、つまりはネブタを合歡木のことだと、考へなくなつてからの空想が元らしく、其終りの囃しのダサバダセヨは、青森市中で流行つて居る「エツペ出せ〜」のをかした言葉と共に、是だけは近頃の改作のやうに思はれる。此部分は寛政の頃にはイヤイヤヨとなつて居た。其イヤイヤだけが何の事かわからぬと言つた人もあるが、残りの文句だつても、實はよく判つて居なかつたのである。

それが今日は比較によつて、もう大よそは明白になつて來た。つまりネブタと豆は二つの稍似た所のある植物であつて、しかも兩語ともそれ／＼に別の意味をもち、一方は甚だ

感心せず、他は好ましいことであつた故に、彼は流れてしまへ是は止まつて居れと言つた所に、水邊の行事としての言葉の綾が珍重せられたので、それにも亦最初何かの木の小枝を以て、身を撫で、流し棄てる習俗が裏打ちをして居るかと思ふ。然るに津輕地方だけに、早くからさういふ風も絶えて居たものか。このネブタの解釋には、思ひ切つて地方的なるものが輩出して居る。畢竟するにこの二つの植物の名の提唱が、今ではあまりにも突兀なものになつて居るからである。

七

青森縣のネブタの研究者としては、棟方悌二氏が最も著名であつた。此人の意見は日本風俗志(上卷四八三頁以下)にも出て居て、十分に穩健なるものであつたが、なほ此一語の意味を明かにし得なかつた爲に、今に至るまで地方の通説を、覆へすことに成功して居ない。最も人望の多い通説は、田村將軍がこのネブタを催して、山に隠れて居る蝦夷の賊を

誘ひ出し、退治をしたのに始まるといふもの、次には同じ策略を以て引捉へた夷民を選別して兇猛なる者は對岸へ放流し、忠順なる者のみを止住せしめた。それが即ち「まめの葉は止まれ」だといふので、此解釋が早くから學者の間にも認められ、或は元祿年間の事蹟であつたと謂ふ人もあり、田村將軍と言出したのは却つて新らしいさうだが、兎に角にこの兩説は關聯して居る。一方が認められなければ、次の説も成立たない。つまりはネブタに佞武人だの佞侮多だのといふ無理な宛字を自分でして置いて、自分で其文字に繋がれて居たのである。ところが一方にネブタは蕃語ならんといふ説があつて、是が亦近頃まで續いて居た。それを又北里闡氏は否認して、ネは稻、ブタは札で稻札のことではないか。水神に捧げて當年の豊收を祈る意味であるまいかと言つて居る(むっ一卷四號)。是等の諸説の優劣を決するのは、少なくとも私の任務ではない。私はたゞ現在の所謂郷土研究が、もし我郷土を視て他を省みなかつたならば、結果は概ね此の如くなるであらうといふことを、例示するだけの小事業を以て、満足しようとして居るのである。

此序に一言だけ心付いたことをいふと、主君や領主に忠誠を盡す者をマメなりといふことは、馬琴などがよく用ゐた語だが、果して文學以外に其様な用語が、津輕は元より他の田舎にもあるか否かは、問題にしてよいことである。自分等の知識では、マメは根氣のよいこと、それよりも寧ろ身體の丈夫なことをいふのが普通で、たとへば婦人の平産してもとのからだになつたことを、東北ではマメシクなつたと謂つて居る。唱へごとも最初は利用者理解して居たであらうから、土地にも無い語の字引の意味に、引付けようとしたのが根本の無理かと思ふ。マメでもネブタでも、土地では何と何とを意味して居るか。それを明かにしてかゝるのが先決問題で、もしどうしても意味の無い語だつたら、それは他所から口移しに、學んだ唱へごたと推定するのが恐らく自然の順序である。

八

他所では少なくともネブタは合歡木と睡魔とを意味し、マメは又豆と壯健とを意味して

居た。其一方を憎んで海川に流さんとし、他の一方の止まつて土地に在ることを、念じ願つた心持はよくわかつて居る。それを早速にアイヌ語に持つて行かうとする、學問の不自然な態度には、結論を超越して私たちは苦情を唱へなければならぬ。

マメが邑里の生活に何よりも大事なことは異存が無い。たゞネプタを災厄として放ち棄てようといふのは如何と、カルモチン常用者輩は一齊に批難するかも知れない。此點が將に私の豫め答へんとする所である。睡くなればいつでも睡られる赤ん坊や閑人ならば、睡は悪で無いのみか、又快樂でさへあり得るのだが、以前はさういふ人が尠なく、又睡るべからざる場合が、今よりも遙かに多かつた。ネプタ其ものは災でなくして、起きて居るべき時に睡いのが不幸であつたのを、測らず混同するほど、よく働き又よく疲れて居たのである。對馬をあるいて居る時に始めて氣がついたのだが、夜分別れる折の常の辭令に、我がオヤスマ又はオシヅカニといふ所を、彼島ではオイザトナといふ語がまだ使はれて居る。五島へ渡つて見ても一部の人が、意味はもう忘れてオイザットとか、イザトバイと

かいふ挨拶をして居る。イザトイは標準語でも、睡つて居て直ぐに目の覺めることである。即ちあまり熟睡をするなどいふ意味としか思はれぬので、私は直ちに元寇刀伊の亂等の、昔の悲惨な記念かと空想して居たのである。ところが十時彌君の話を聴くと、筑後柳河でも上流の士分の家では、子供のオヤスマナサイが定まつてオイザトウであつたさうだ。捜せば西國にはまだ弘く残つて居らうも知れぬ。即ち餘りにいぎたなく打つても目覺めぬ様に寝込んでしまふことは、古風な人々には幸福なことではなかつたのである。朝のオハヨウの方には是がまだ弘く残つて居る。餘りよく寝て遅く起きることは、町の遊民にもなほ慶賀すべきことではなかつた。たゞ星を戴いて野に出る者ほど、この睡たさを苦しなかつたといふだけである。

次にさういふネプタを流し去り得るものと、心得て居たのがをかしいと思ふ人たちも勿論今は多い。是は一年の間の生日足日即ち方式の殊に効果多き日があつて、其日に念じた願ひは常よりも殊によく達せられるといふ考へ、及び災禍害悪には必ずエジエントがあ

つて、適切なる時と方法を以て交渉すれば、豫め其結果が避けられるといふ信仰、この二つが昔はあり今は無く、もしくは昔は一般の常識であり、今は一部の迷信になつて居るからで、之を認めざる者には奇怪であり不條理である如く、認めて疑はぬ者にはおのづから其説明があつたことは、現在まだ少しも進んで居ない民族心理學の課題である。七月七日に髪を洗へばよく落ち、七度水に泳げば身が健かになるといふなども、不完全ではあらうが兎に角に經驗であつた。さういふ中でも最後まで残つたのは田の虫追ひである。雨乞ひも曾ては是と近い惡靈のわざと考へて居たやうで、よく似た様式を以て早魃の神を驅逐した。日を定めて行ふものには正月十五日を利用した例が最も多かつたが、他の月も満月の宵は價值を認められ、是に次いで重んぜられたのは上弦と下弦、即ちこれを前後に距ること一七日の日が重要な期日と考へられて居た。私の方法は理論を立て、説明をそれから導かうとせず、専ら事實に據つて法則を見出さうとするのだから、資料の完備せぬ限りは斷定を下し得ないが、少なくとも今まで集められて居る例證から、七日殊に正月と七月と

の七日が、何か特別の意義のある日であつたらしいことだけは推測せられるのである。

九

それを今少しく考へて見る前に、先づ斯ういふ一年の最も有効なる節日に、如何なる災厄が除去せられようとして居たかを説いて「睡た」を流すといふことの必ずしも歴史無き空想でなかつた例に引いて見よう。虫追ひは今では害虫の發生した時だけにするが、奥州には毎年六月朔日を期して、蚤を驅除する風習もある。ギシギシといふ草を方言にノミノフネと謂ひ、是を室内に撒いて後で集めて流すと、蚤はこれに乗つて海へ行くと信ぜられて居る。ジャジャ又は蚊の口焼き、蛭や蝮の口焼きといふ式などは、まるで其虫の居らぬ節分の晩、もしくは小正月の宵に行ふので、爐の火に榎の葉などをくべて唱へごとをする。之に由つて或は此式をヘビムカジと謂ふ土地もある。弘く保存せられて居るのは鳥追ひと土鼠打ちで、是も正月の鳥獸の少ない時に豫行する爲に、次第に遊戯化して子供の役とな

り、江戸では非人の娘などが其歌をうたつて門附けをした。しかし本來はこの一年の最好の日に行へば、効果は四季に及んで、忙しい日の勞を省くと思つて居たのである。東北では此際又鹿追ひも狼追ひもし、或は鳥の巢あぶりといふこともした。信州川中島の松葉いぶしは、貧乏神を追出すと今では謂つて居るが、或は是も獸害の防止だつたかも知れぬ。近畿中國には狐狩があつた。狩とは謂つても後には食物などを供して、機嫌を取るやうな土地もあつた。さうで無くとも大抵は威嚇だけで、事實捕獲をしようと迄はしなかつた。若狭の佐分利村の唱へごと、

狐の鮮は七桶になから

八桶に足らぬとて狐狩やんれい

といふがある。つまりは威勢よく相手へこませる文藝であつた。

武藏の杉山神社の正月の田遊び祭に、唱へた言葉といふものが傳はつて居る。主として鳥追ひだが其序に追却しようとしたものに、田螺けらから家々の口争ひ、女房の小鍋食ひ

まで追拂へと謂つて居る。陸中紫波郡の小正月の豆蒔きには、

がいき鼻だれ、やんまいやく病、びようやく病、ねこものはれもの、

貧乏神やふんではれ、福の神や内におんでやれ

といふのがある(郡誌)。ガイキは感冒、ネコモノは腫物も同じでフンデハレは踏み出はれだから、趣意はネプタ・マメノハとよく一致して居る。信州上水内の瀬戸川村には、正月十五日の早朝に鳥追ひの次に唱へる、オデキ追ひの言葉がある。

向ふ通るアキヨンド

ねぶつはれもの

買つてけしよつてけホウイホウイ

といふので(民族二卷二號)、村に入込んで來る行商人も、どうやら此機會を以て豫め追はれたらしいのである。斯ういふ色々の村の爲に好ましからぬものが、この一種の示威運動的方式を以て、毎年定まつた日に追却せられるといふことが、郷土の氣風に暗々裡の影響を

與へて居たことは想像し得られるが、さういふ中でも異なる日、又は岡の上とか水の邊とかいふ場所のちがひは、何か本原に溯つての考へ方に、特色があつたことを語るものではなかつたか。或はそれはたゞ偶然の地理的状況に基づくものであるか。此點が次の問題として残る。私の殊に興味を感じる一例は、同じ信州でも南端の伊那遠山に、正月七日のサガ流しといふ行事があることである。是はたゞ單に門松を川に流すことゝあるのみで詳しい説明はまだ聽いて居ないが、サガは古くから善惡の文字などが宛てられて、よかれ悪しかれ物議の種、今で言へば問題になる事件とでもいふべきもので、此等を概括的に村の人が嫌つて、極度の無爲を願望したものと思はれる。それを特に正月の七日日に、水のほとりで又正月の飾り物を流すことによつて、なし遂げ得るものと信じたとしたら、其根據は果して何に在つたらうか。又全國に弘く分布する七月七日の眠流しと、どういふ關係をもつと見るべきであらうか。はつきりとは判らぬ迄も、私は追々に其問題の核心に近づいて見た。

一〇

現在知られて居る事實だけに依つて見ても、所謂七日盆の習俗には、織女牽牛の支那から來た傳説と、何等の交渉の無い部分が可なり大きく、又我々の民間の星合ひ祭にも、かの古今集の和歌に列記してあるやうな、優美なる詠歎以外の感覺が加味して居る。たとへば鳥取縣などの在方では、此日一粒でも雨が降れば、天の川に水が出て渡られぬからよいが、もしも雨無く川が渡られて二つの星が逢ふと、病の子が生れるから怖ろしいとも謂つて、寧ろ此戀愛に反感を示して居る。今までは誰も氣づかなかつたが、此日の祭壇にも瓜茄子の牛馬、もしくは初物の野菜果實などを供へることが、可なり著しく盆棚と似て居る。さうして翌早朝は大急ぎで、笹竹飾り物を流しに行くのである。或は此日を危険な日として、道切り注連繩張りなどの防衛策を講ずる例も少なくない。是等は何れも慎重に境を淨め、あらゆる目に見えぬ障害を除却しようとした、久しい仕來りの反映に過ぎなかつたか

も知れぬが、それにした所で何か其前途に大きな不安が想像せられなければ、斯くまでの煩はしい手続きは盡さなかつた筈である。今日はもう既に状況は變つて居るけれども、私は是を初秋満月の夜の祭を完全ならしめる爲の、一週間前の準備作業、即ち令に致齋と謂つて居る期間の、開始せられる方式では無かつたかと思つて居る。

是を確かめる爲には我邦民間曆法の變遷、それと古信仰との關係を尋ねて見なければならぬのだが、幸ひにして其便宜は今でもまだ絶滅して居ない。たとへば初秋の七夕と、ちやうど對立して一年を切半して居る初春の人日、即ち六日から七日に渡つて行く境を、御湯殿上の日記等には、また一つの年越と認めて居るが、京都で著名なのはたゞ早朝の七種の粥の行事のみで、其他の慣行に就いては、もう田舎を求めなければならぬ様になつて居る。信州では是を六日正月、或は又蟹年とも名づけて、蟹を捕つて來て門の戸に打ちつけ今では其代りに紙に畫を描き蟹の字を書いて貼つて置く習俗が、意味は判らぬなりにひどく目につく。山陰の舊家には椀籠負わんかごおひといふ祝言があり(民俗學四卷四號)、九州南部に行く

と竈の前の田の神舞があり、或は又各地方の七軒もらひがあり、さうして又前にいふが如きサガ流しもあるのである。少なくともこの正月七日を重要視して居た動機は、七月七夕と共に外來のものでは無かつた。さうして盆と正月との二度の行事には、其根柢に於て幾つと無き方式の併行が見られるのである。

以前佛教がまだ常民の風習に干渉せず、即ち所謂盆の月を以て全く新亡者の供養に委ねてしまはなかつた時代には、この春秋二回の第一の望もちの夜は、大體相似たる祭典が行はれて居たらしいのである。日本固有の齋忌制に於ても、勿論新たに喪のあつた家は分離せられる。だから正月にもアラミタマの家には別の行事がある。しかし三年七年十三年といふ様に、いつ迄も記念を繰返し追慕を新たにし、七月を徹底的に線香くさくしたのは、恐らく外來教の信仰だつたらうと思ふ。我々の祖靈は早く清まはり、神の大きな一團に入つて活きた子孫と共に季節の悦びを味はつて居たやうである。一つの混同は外聖靈(ホカジャウリヤウ)、土地によつて無縁とも餓鬼とも呼ぶものが、數多く紛れ込んで村々の内輪の團

樂を攪き亂すことであつた。それ故に古風な家々では、正月でも別に彼等の爲の食物を供與して、その嫉視と妨害とをなだめようとして居る。それが盆の方では殊に怖れられ信ぜられて、屢々家の先祖の靈との、分堺を見失うて居るのである、是は多分所謂新佛の立場と子孫の祀りを受けずに迷つて居る三界萬靈の態度とが、共に生人に好意をもたぬ點で、幾分か相通するものがある様に、考へられて居た結果であらう。この二種の亡魂を意味する語を正月はミタマと謂つてミタマの飯を供へ、盆にはシャウリヤウと稱して聖靈棚をしつらへた。ミタマも聖靈も同じもので、只一方だけが佛徒によつて音讀せられたのである。京都四周の大きな御社や寺で、御靈會又は聖靈會と名づけていと花やかなる儀式の行はれて居たのも、要は共同に是等の亡魂を慰撫して、人生に向つて其幽憤を漏らさしめぬ爲であつたことは、記録が既に之を語り傳へて居る。其期日は若干の入れちがへがあるが、最初は何れも居民の畏怖不安の、最も忍び難い時が指定せられたのが、後次第に恒例となつたものと思はれる。七月七日の宵曉を中心としたネブタ流しを、一種の御靈會だと言ふ説

は正しいと思ふ。風でも蟲でも多くの生物に對する障碍は、皆夏秋の交を以て出現したといふだけで無く、盆は又新古さま／＼の聖靈の、わざ／＼招き寄せられる劍呑な季節にもなつて居たからである。

一一

日本北半の七日日行事、殊に秋田津輕の眠流しの大祭が、東海近畿から彼方の各都會に今でも盛んに行はれて居る十六日の魂送りの式と、非常によく似て居る理由も是から説明し得られさうだ。即ち本來は盆を正月同様の悦ばしい祝ひの日とする爲に、前以て無縁の氣味の悪い靈だけを、なだめ賺して立退かせてさへ置けば、後は心安く落付いて祭をすることが出來ただけけれども、餘り熱心に多くの死者を供養するやうになると、もう一度其日を過ぎてから、送りの式をせぬと氣が濟まぬやうに感じ、且つ次第にこの方へ重きを置いて、第二次の分を簡略にする結果を見たので、言ひかへると七日の眠流しの方が、一つ

古い形であつたのだが、今日はもう其目的を局限して、主として睡たくなる不幸を、こゝでは追ひはらうとして居たのである。さうして睡たも亦或亡霊のわざであることを忘れかゝつて、別にさういふ名の忌はしいものが、獨立してあるかの如く考へ出したのは、さして珍らしくも無い信仰の分化であつた。

是とよく似た變化は正月の方にもあつた。トンドといひ又三掬杖さんくつじやうともいふ正月の火祭は京都と其周圍は十五日を定日とし、別に十八日にももう一度行ふのが、記録の存する限りの古い例である。東國でも是を行ふ土地は大抵は十五日を用ゐて居る。ところが九州の鬼の火といふものは、北から南まで大部分が七日の行事であり、たゞ僅かの區域だけで十五日にももう一度之を執行する。即ち正月と七月とは、南と北の端では此前後が逆になつて居て、しかも双方共に一部づゝ、古い形を保存して居るやうに見える。正月十五日の火祭は、神送りとは普通認めて居らぬが、それでも福島縣などでは歳神が此煙に乗つて、還つて行かれる姿が西の空に見えると謂つて居る。七日の鬼火に至つては其名の示す如く、明

白に祝賀の火でも無く、又飾り物の處理方法でも無かつた。以前モチの日即ち正月十五日が一年の境であつた時代に、其日を神聖ならしむべく、外部の障除を除去する目的であつたことが、唱へごと其他の殘留からも察せられる。つまりは爰でも亦事前の火祭が、一つの段階としてなほ保存せられて居たことは、奥羽信越等の眠流しも同じであつた。十五日の第二の火祭も夙く始まつて居たかも知らぬが、是に少年青年の興味が集注するやうになつたのは、少なくとも後期のことのやうである。

越中中新川郡のネブタ流しが、舊六月晦であつたことは前に述べたが、其東鄰の下新川の沿岸には、正月十五日に之を行ふ村々があるといふ。勿論寒い頃だから水泳ぎはせず、たゞ藁の束に火をつけて、海に投込むだけだといふ（風俗叢報二二四號）。もつと他にも類例が出て来ないと、是たゞ一つでは安全でないが、今日は全然二つのものゝ如く、考へられて居る盆と正月との火祭の、起りは一つであつたといふ證據にはなりさうである。是と相對して、土佐の西部の海岸で、ヨシホ様といふ正月十四日の夜の行事は、名は全くちが

ふが、内容は信州三河の眠流しとよく似て居る。是は村内各戸から竹一本づゝを出し、それに女たちが五色の短冊をつけて、臺に載せて曳き廻はり、最後に濱に持出して注連飾りと共に焼き、それから其火に身を煖めつゝ、若者等は海に飛込んで潮を浴びるのださうである（櫻田勝徳君報）。この藁炬火と短冊付きの笹と、二つのものは夜と晝とのちがひで、共に送らるゝものゝ標識であることは同じかつたかと思ふ。拂曉の行事としては照明の必要は無く、何か一つの目標になるものを持つて行つて流せばそれでよかつたので、合歡木の小枝をネブタといふ名の縁から、携へて行つた目的もそれかと思ふが、燈火の方が實は見た目には美しく、又前の宵から飾つて置いて祭を營むにも花々しかつたので、紙や繪具や蠟燭が手に入りやすく、又若者の手工が進むと共に追々に此方へ進んで行つたのである。九州の盆の精霊送りで、最も青森のネブタと近いものは、肥後の山鹿やまがの骨無し燈籠などであらう。是は足利期末の文祿年間に、炬火を燈籠に改めたといふ古い記録があつて、次第に發達して人物宮殿その他色々の意匠を争ひ、所謂運行の方法までが、言合せたほどネブ

タとよく似て居る（土の鈴三號、旅と傳説三卷九號）。しかも他の地方の數多くの精霊舟の中には、人物を主とし食物に重きを置き、白晝全く火を用ゐぬものも決して稀でない。さうしてすべてに共通して居るのは、海に沿うた村では海へ、海なき邑里では川筋へ、送り流すといふ一事だけである。夏の御霊は海から上つて来て、初秋に送られて再び海へ還つて行くものと信ぜられて居たのである。さうして人間の常に働かうとする者を、睡たくするのも彼がわざと、考へられて居たのである。

（昭和十一年六月）

犬飼七夕譚

一

七月七日の朝、島へ入つてはならぬといふ昔からの言傳へは、農村としてはさほど珍らしい話でないかも知れぬ。他にも十月の十日、大根島に入るべからずといふ類の、農作の制止は例が多いのみならず、それを犯せば蟲が付き雑草が茂り風が吹き、又は自身が病氣をするといふなどの制裁もよく似て居る。何れも皆大切な節日の慎みであつたと、想像してよいやうである。こゝで問題になるのはこの七夕の場合だけに限つて、是は條件が添ひ又特殊の解説が出来て居ること、よそにも同じやうな話は残つて居るだらうが、信州の例だけが現在は知られて居る。多分は斯ういふ物忌ものいふのものと意味が、誰にもわからなくな

つてから後の變化で、是も亦我々の通つて來た永い年月の精神生活を、回顧する目標には役立つのである。

信州では大抵どの郡でも、古い人たちの斯ういふことを知つて居る者が多いかと思ふ。私は南安曇郡の年中行事篇から、此事實を引用するのだが、こゝでも家によつて少しづつ言ふことは違つて居る。たとへば此日は一日野菜島へ入つてはならぬ。入ると蟲がつくといふもの。蔓ものゝ島だけへは入らぬやうにするといふもの。夕顔島には入るべからず、入ると身が溶けてしまふ。此日は七夕さまが夕顔島へ入つて居られるからといふもの。及び七夕は七ツ時から、さゝげ島へ下りて逢つて居られるから、其島だけへは入つてはいけないといふもの等がある。隣の北安曇郡でもすつと北へ寄つて、同じ理由で大角豆島へ入らせぬ村があり、又夕顔棚の下へ行くと、七夕様の天の川の御渡りなさる音が聴えるといふ村もある。小縣郡の方でも、此日みづら(さゝげ)の島へは決して行かず、やはり其島へ七夕の神が、降りて隠れてござる様にいふ者があるといふことである。夕顔を島に作る

といふ土地は、栃木縣へでも行かぬとさう多くは見られない。さゝげも新らしい作物のやうだから、其栽培面積もさう廣くはなかつたらう。禁忌を斯ういふ風に或作物だけに限局して置けば、農民の行動もよほど自由にはなるわけだが、單に其爲に發明せられたものとしては、今ある由來譚が少しばかり奇抜過ぎる。是は一應考へて見てもよい問題だと思ふ。

二

私の心あたりは、以前は農村で人望のあつた七夕の昔話に、瓜や其他の蔓物を説くものが多いことである。信州でも何處かにまだきつと有ることと思つて居るが、今知つて居るのはたつた一つ、上伊那郡小野村の年中行事篇の中にそれが見えて居る。

昔一人の老翁があつた。瞿麥なまこの花を栽ゑると天人が降りるといふことを聞いて、庭に其種子を蒔いて見ると、果して天人が降りて來て水に浴して遊んだ。その一人の羽衣を取匿し、困つて居る天人をつれ歸つて、共に楽しく暮らして居たが、馴れるに任せて羽衣を匿

したことを打明けたところが天人は早速その羽衣を捜し出して、それを着て天へ還つてしまつた。其折に、もし私に會ひたいと思つたら、厩肥を千駄積んで其上に青竹を立て、それに傳はつて昇つて来いと言つたので、男は其通りにして後から天へ昇つて行つた。天では別に何の用も無いので、畠の瓜をもぐ手傳ひをして居た。さうして天人の戒めを破つて其瓜を二つ食つたところが、忽ち大水が出て別れ／＼になつてしまふ。是からはせめて月に一度だけ逢ふことにしようと言つたのを、傍からアマノジャクが、なに一年に一度だぞと言つたので、今でも此日だけしか逢ふことが出来ない。又七夕の日に青竹を立てるのは斯ういふいはれだと此土地では謂つて居る。

是たゞ一つを聽いては合點のゆかぬことが、此昔話の中には幾つもある。第一には厩肥千駄の上に青竹を立てると、どうして天へ昇つて行くことが出来たのか。第二にはアマノジャクの意地悪な差出口が、忽ち効果を生じて七夕の運命を變更したといふことは、どういふ處から出て来た話であらうか。第三には食べるなどいふ瓜を食べたら、大水が出たと

いふ點、是もこの一例だけでは餘り突兀として居て、をかしい感じすらも起らない。斯ういふのが今後の採集と比較とによつて、段々にもとの心持が判つて来ようとして居るのである。簡単な言葉でいふ、是が我々の俳諧の、まだ十七字とか十四字とかいふ、定まつた型にはまらぬ以前の姿であつたらしい。文字に録せられて居る現在の俳諧でも、たつた二百年も過ぎれば實は半分はその言葉の意味を解する者が無い。しかも聯想の鍵と仲間の共鳴とが無くて、生れた文藝は一つだつて有り得ない。同じ血を分けた子孫の我々として尋ねて其動機の捉へられぬといふ筈は無いと思ふ。今まではつまり其練習が試みられなかつただけである。

三

青竹の昇天も、天探女あまのさぐめの中言なかごとも、それ／＼に斯うなつて来る順序はあつたのだが、それよりも瓜と蔓物の畠の事から始まつた話だから、其方を先づ一通り片づけて行くことにし

よう。信州とは恐らく何の直接の関係も無しに、ずつと南の鹿兒島縣の喜界島には、七夕の由來として次のやうな昔話が傳はつて居る。

此島では天人をアムリガー、即ち天降子と呼んで居る。昔々一人の若い牛飼があつた。姉妹の天降子が天から降りて、野中の泉の傍の木に美しい飛羽とがはねを掛け、水を浴びて居るのを見つけて、その飛羽の一つを匿した。姉の天降子は驚いて飛んで天へ還つたが、妹は何と頼んでも牛飼が飛羽を出してくれないので、困つてたうとう其牛飼の嫁になつた。それから幾年か仲よく暮して後、二人は天とうへ親見參おやけんまに行くことになつた。其時は以前の飛羽を出して着て、夫を脇にかゝへて空を飛んで行つた。飛びながら其女房がいふには、いつ迄も私と離れたくないならば、天とうへ行つて親たちが縦に切れといふものを、必ず横に切りなさいと、固い約束を夫にさせた。天とうではちやうど胡瓜の季節で、二人の取持ちに島から胡瓜を採つて來て出した。さうして男が庖丁を手を持つて居る時に、不意に親がナイキリー(縦に切れ)と謂つたので、うっかり女房の戒めを忘れて、其瓜を縦に切つ

てしまつた。さうすると忽ち眼の前に大きな川が出來て、天女と牛飼とは兩方の岸に分かれてしまつた。それが七月の七日で二人はそれ以來、一年に一度、此日でなくては逢へないやうになつてしまつた。

沖繩の多くの島々には、羽衣を匿して天人を妻とした昔話がどこにもあるが、それが今でも年に一度逢ふ七夕であつたといふ語りは、是たゞ一つの他はまだ私は聽いて居ない。島の羽衣譚では、通例は夫婦の間に子供が二人又は三人生れる。其兒がやゝ大きくなつて姉が弟を遊ばせる子守唄の中に、飛衣とがまぬは六股の倉に、稻積の下に置いてあると歌ふのを母が聽いて、それを見つけて天へ還つて行くので、近頃日本青年館で演出せられた銘刈めかり子なども、亦其一つの文藝化であるが、是で話が終つてしまふのは如何にも寂しい爲に、色々の後日譚が其あとに附くことになつたやうである。

四

最初に是を或るすぐれて舊い家の血筋と、結び付けようとした試みがあつたのは自然である。沖繩では王家の外戚の特に有力なものが、傳説として久しく之を信じて居た例もあるが、是も多分は齋宮の職分が、王妃の手に移つた變遷と關係して居るのであらう。其他の場合には羽衣天女の後胤は、必ず女系を主とする巫女の家であつた。天人に男女の兒が生れたといふ形も、元は此動機から強調せられたやうに思はれる。とにかく爰に一つの改定が行はれたにしても、其改定は十分に敬虔なものであつた。それがいつとも無く奇を競ひ變化を愛するやうになつて、終には今日の如くたゞ大衆の笑を博することを、目途としたかと思ふ話ばかり多くなつたのである。是を歴史の次々の過程と見なかつたら、説話の解釋は行詰まるにきまつて居る。さうして又我等の親々が、激しい勞働のひま／＼にも、なほ心を空想の世界に遊ばせて居た、ゆかしい餘裕が不明に歸することであらう。

しかし幸ひなことには我邦の羽衣説話は、まだその進化の各段階に於て保存せられて居る。同じ一つの喜界島にも、まだこの七夕由來と結合しなかつた、以前の形とも見るべき

ものが聴き出し得られる。たとへば百姓に飛羽を奪はれて、無理に伴なはれて行つて其家の妻となつた天降子が、二三人の兒を設けて後に、やはり沖繩の記録にもある様に、上の兒の子守唄によつて飛羽の所在を知り、それを出して着て三人の兒を抱へて天に飛び還つた。ところが天上も既に昔とは變つて、自分の家屋敷さへ無くなつて居たので、再びその三兒を地に下して來た。それがトキとノロとユタと、三種の巫女の先祖になつたといふのは、浦島子を逆に行つた様な話である。或は兄妹の二人が天から追ひ下されて、島の内をさまよふ内に、妹は或農民に嫁して三子を儲けた。稲麥の芒むぎを厭うて、毎年暮春の麥の赤らむ頃から、飛羽を着て天に昇り、夏の稻取入れが終つて後に、戻つて來るのを習ひとして居た。其夫がそれを欲せずして飛羽を匿すと、是も亦子守唄によつて在りかを知り、それを着て飛んで今度は戻つて來なかつた。それでも時々白鳥の首に團子を掛けて、子供之處へ送つて來て居たのを、それさへ夫が嫌つて、或日弓を張つて其白鳥を射殺した、それを限りとして天と地との合圖は、永久に絶えてしまつたといふ様な話もある。

五

この天と地との交通といふことは、當初の羽衣説話の主要なる目標であつた。それを信ずることの出来ぬ者が多くなるにつれて、追々に話の誇張は烈しくなつて來たやうである。肥後の天草地方に數多く傳はつて居る七夕の由來譚なども、大抵は亦此類に屬し、且つ前に引用した信州上伊那の話とも聯絡をもつて居る。丸山學氏の採集した一例では、天女の着物を匿してそれを娶つた若者は、其家に一匹の犬を飼つて居た。さうして二人の間に兒があつたことは説かない。三年もしたからもうよからうと思つて、匿した着物を出してやると、天女はそれを着て早速昇天してしまつた。若者は戀ひ慕うて歎いて居ると、人が來て天に昇つて行く法を教へてくれた。それは一日の中に百足の草履を作つて、一本の糸瓜のまはりに埋めて置くと、瓜の蔓は一晚に天に届くから、それに傳はつて行けといふので喜んで其通りにすると、九十九足しか出来ぬうちに日が暮れた。それでも相應に糸瓜は空

高く伸びたので、それを攀ぢ登つて行くと犬も後から跟いて來たが、草履がたつた一足だけ足らぬばかりに、天までもう一步といふ所で糸瓜は止まつて居る。さうすると犬は飛上がつて尻尾を垂らし若者はそれにつかまつて、やつとのことで天へ昇つて行くことが出来た。其若者が犬飼さん、天女は即ち七夕さんであるといふ。

故濱田隆一君の天草島民俗誌にも、別に又四つほどの七夕の昔話を採録して居るが、其中の二つはやはり瓜に關するものであつた。或は近世の語りひがめもあつたかと思ふが、爰では七夕様は一人娘、犬飼さんは養子であつたなど、謂つて居る。其犬飼さんが農業がへたくそで、おまけに耳がつんぽであつた。それで或時七夕が短氣を起して、機を織つて居られた棧ひを投付けなされると、犬飼さんも腹を立て、七夕の作つて居られる瓜畠の瓜を眞二つに切割つてしまはれる。それが天の川になつて二人の間を隔て、終に一年にたゞ一度しか、川を渡つて逢ふことが出来ぬやうになつたと謂ひ、或は又犬飼が母から西山の一町歩もある畠を耕すやうにいひつけられて、あまり暑くて咽が乾くので、妻の七夕の止

めるのも聴かず、そこに生つて居る瓜を食べようと思つて、二つに豎に瓜を割つたら、それが忽ち天の川になつた。それ故に今でも瓜を七夕に上げると、それが天の川になつて流れるなども謂つて居るさうである。

六

以上三つの天草島の瓜話は、或ものは既に破片であり誤傳であるかとも思はれるが、共に喜界島の天上掣入、及び信州小野村の瓜畠手傳の話と、各自獨立に發生したもので無いことだけは察せられる。それが又どうして此様にも飛離れて、別々に保存せられて居たらうかは、今はまだ解説し難い問題であるが、大體に昔話が至つて數多く又變化に富み、明けても暮れても人の口に上り、もしくは思ひ出されて居た時代が、曾て我邦にもあつたらしいのである。さういふ中から何か因縁があつて、ほんの一部分だけが消え残つた爲に、今のやうに珍らしい分布状態を示すのかと私は思つて居る。所謂天人女房の昔話などは、

元は神秘的な大切な言傳へであつたらうと思はれるにも拘らず、その破綻と終局とを、如何にも不真面目に笑話化する風が、もうよほど早くから始まつて居た。前に「竹取翁考」の中でも注意をしたことがあるが、奄美大島の最も外部と交通の少ない地域にも、をかしい位この天草の話とよく似た話があつた。むかし一人の翁が、クロといふ犬を飼つて居た。或夜山中の池のほとりに音楽の聲を聴いて、往つて見ると天女が水を浴びて居た。是も飛衣を取匿してその天女を妻とし、三人の兒を儲けて後に子守唄によつて飛衣の在りか知られたといふ迄は他と同じく、天に還つて行く時に二番目の兒は頭に載せ、末の兒は手引いて行かうとしたが、重いので此子だけは後に残したと謂つて居る。父の翁は是を知つて愛慕の情に堪へず、急いで千足の草履をこしらへて、それを踏んで天に昇つて行かうとしたが、千足と思つた草履は九百九十九足で、たつた一足だけ足りない。さうすると飼犬の黒が進み出て、私が其草履の代りになりませうといふので、翁はその九百九十九足の草履と一匹の犬に乗つて、天界に昇つて行つた。さうして其翁は一番の夜明け星となり。

二番の夜明け星には飼犬の黒がなつたと謂ふ結末になつて居て、是はまだ織女牽牛の、年に一度の逢瀬といふことは、結び付けられて居ないのである。現在の不完全なる採集状態に於ては、まだどの様な想像説でも成立し得るが、しかも其當否の裁決せられる時やがて来る。私はこの天に昇つて星になつた話が先づ生れて、それから七夕の方へ伸びて行つたものかと思つて居るのだが、果してこの豫測は適中するであらうかどうか。

七。

それにはもう少し瓜の空想の成長して來た順序を考へて見る必要がある。島原半島民話集に載せられて居る「天人女房」も、既に亦思ひ切つた笑話化であるが、是には尙七夕の由來譚を伴なうて居ない。むかし源五郎といふ男が山中の池のほとりで、天人の着物を匿して例の如く女房にする。子どもゝ生れたので、もう大丈夫と思ひうつかり在りかを告げると、それを着てさつさと還つて往つた。其別れに臨んで天人がいふには、もし私に逢ひ

たうなつたら、あめ牛千疋を土に埋め、其上にブナ（南瓜）の種を播き、其蔓を傳うて昇つて來なさいといふ。それで逢ひたさの餘りに、諸方があるいて黄牛を買ひ集め、九百九十九疋までは手に入つたが、残り一疋はどうしても見つからない。一疋ばかりはよからうと庭に穴をほり、其牛を埋めて上に南瓜を播くと、果してぐんぐんと成長して、もう梢の方は見えなくなる。それを攀ぢ昇つて天竺まで行くと、或家の裏の垣根にやつと蔓の端が引掛かり、今にもはづれさうになつて居たけれども、折よく水汲みに出た女が前の女房であぶない所を手を執つて引上げてくれた。それから天竺では別に仕事も無いので、頼まれて雨降らせの手傳ひをする。桶の水を柴に浸して公平に日本國中に雨をまくのが役であつた。或日自分の村の上へ來て、今頃は雨乞でさぞ困つて居るだらうと思つて、思ひ切つて一桶の水をうちまけたところが、水の重みで雲が破れ、其穴から源五郎は落ちる。下が近江國で二圓の湖水となり、源五郎も大きな鮎になつて其中に住んで居るといふ。

此後段は弘く西國に源五郎話として知られて居るもので、無論島原地方だけの特産では

無い。本國の近江では却つてまた聞いたことは無いが、京大阪にも以前はあつたらしく、關東東北では源五郎を主人公としたものゝ有無は知らぬが、九分まで内容の同じものを村に持つて居る。是を分類して居ると又話が長くなるから略するが、其一部には越後の大豆の木、もしくは奥州の茄子の木話のやうに、或植物の急激な成長に伴なうて、天に昇つて行く便宜を得、乃至は天の雷神の娘を娶つたといふ類の話もあるのである。私が想像して居るやうに、是が天上掣入譚の一つの後世の變化といふことは、まだ心もとないにしても、少なくとも瓜が七夕話の専屬でなかつたことだけはわかる。

八

話がやゝ西國の方に偏したから、今度は方面をかへて遠い類似を尋ねて見る。津輕ムガシヨ集には「天さ伸びた豆の話」といふのがある。是も天の女子の飛ぶ着物を若者が隠して家へ連れて来て夫婦になり兒が生れる。其兒がよく啼く兒でアダゴ（子守）が幾らだま

しても啼き止まぬが、不思議に坪庭の松の木の下へ來るとびたりと啼かなくなる。それを女房が子守から聽いて、そこを掘つて見ると飛ぶ着物がいけてある。悦んでそれを着ると急に身が軽く天へ還りたくなつた。そこで子守を呼び一粒の豆をくれて、此兒が大きくなつたら此豆を流しの下に植ゑて、それに傳はつて天さ來いと、言つたまゝ高い空に飛んで行つた。アダゴは其言ひつけ通りに兒を育て、やがて豆粒を流しの下に蒔くと、豆は忽ち芽を吹いてぐんぐんと天さ伸びて行つた。二人は大喜びで豆の莖を傳はりながら、母の居る天へ昇つて行つたと謂つて居る。

次は因伯昔話に採録せられて居る羽衣石山（ウエシヤマ）の口碑、是は半分傳説のやうになつて居るが、話の筋には共通の點がなほ多い。農夫に羽衣を匿された天人が、天上の事を忘れてしまつて、其男の妻となつて二人の娘の母になる。娘は音曲がすきで又舞の上手であつた。或日其羽衣を携へて、母子三人で倉吉の神阪へ遊びに行き、姉妹は其羽衣を着て舞を舞つた。其あとで母が試みにそれを着て見ると、忽ち人界の心を失つて、天へ還

つて行く氣になつた。さうして以前の夢に白い花の咲く蔓草の下で、子供に救はれて天へ還れると夢を思ひ出したが、果してそこには夢の告げの如く、夕顔の花が白く咲いて居たといふのである。

斯ういふ一つ／＼の例を眺めて居ると、夕顔でも南瓜でも、何かそれ／＼の深い意味があるやうに思はれるが、話の他の部分は連繋して居て、此點ばかりが獨創であつた筈はない。元はたゞ單に成長の早い植物、どこ迄伸びて行くか知れないものゝ興味が、偶然に空想の上に出現して、後久しく消え残つて居たのである。さうして百足の草履とか千頭の黄牛とかの、餘りにも奇抜な條件すらも、信州の千駄の厩肥と比較することによつて、始めて其來由を明かにすることが出来る。つまりはその天地に梯を架ける一本の蔓草の、非凡な發育を念じたものに過ぎなかつた。たゞ後者は其瓜と青竹とが、もう離れ／＼のものにならうとして居ただけである。

九

それからなほ一つ、庭に瞿麥を栽ゑると天人が降りて來るといふことを、人に教へられて試みたといふ發端も、信州だけにある珍らしい例のやうに見えるが、捜せば是にやゝ近いものが他の土地にもある。羽衣の發見をたゞ偶然の幸運のやうに説くのは、却つて私は新らしい形ではないかと思つて居る。安藝國昔話集にある佐伯郡の羽衣譚は、主人公は獵師で鹿の恩返しといふことになつて居る。鹿が白髮の翁に化けて來て、明日は天人が川に下りて水を浴びるから、松の樹にかけてある羽衣の一つを匿して、その天人を嫁にせよ。さうして二人の兒が生れるまで、其羽衣を見せてはならぬといふのだが、此傳承には誤りがあると見えて、其戒めを守つたにも拘らず、やはり天人はその二人の兒を兩手にかゝへ羽衣を着てすうつと飛んで往つてしまふ。そこで獵師が泣いて居ると、同じ老人が再び現はれ、あすの朝はあの川へ天から金のタゴ（櫓桶）が下つて來るだらう。それは天人が水

を汲むのだから、其中へ入つて居れば引上げてくれると教へる。乃ち其通りにして親子四人楽しく天上に團欒するといふ話で、今まで列記した各地の例と比べて、又少しばかり變つて居り、或は新趣向かといふ様な氣もする。

ところが實際は飛んでもない地方に、是とよく似たものがやはり傳はつて居たのである。孫晋泰君の集めた朝鮮民譚集七四頁に、木樵が山中で追はれて來た鹿を救ふと、それは山神の鹿の姿をして居るのだつたといふ話がある。何を御禮にしようかと聞かれて、私はまだ獨身だから嫁がほしいと言ふと、そんなら此奥の池に仙女が沐浴して居る。そこへ行つて羽衣の一つを隠してしまへ。但し子供が四人になる迄は、其羽衣を返してやつてはいけない。三人のうちは兩腋と足の間に挟んで、一緒に飛んで還つてしまふからと教へられる。其戒めにも拘らず三人の兒が出來て、もうよからうと思つて羽衣を出して遣ると、果して其三人の子を挾んで飛び去つてしまつた。それを悲しみ歎いて獨り居る樵夫の家へ、又前年の鹿が來ていふには、もう一度あの山の池に往つて見よ。そこには天から水汲瓢ひきかが

下つて來るだらう。仙女たちは一度羽衣を盗まれてから、懲りてもう降りては來ない代りに、瓢で水を汲んで天上で浴びて居る。だから其水を蹴して自分が其中に入つて居れば、容易に天に昇つて妻子に逢へると、教へて貰つたことになつて居る。即ちかの黄金の櫓桶も、やつぱり瓜のたぐひの瓢であつたのである。

一〇

どこ迄行つても同じ話だから、もう此邊で列記を切上げる。終りに問題として残るのは七月七日の朝、瓜大角豆の畠に入つてはならぬといふ信州の俗信に、隠れて影響を與へて居る七夕の由來が、いつから又如何なる因縁で、この世界的なる羽衣説話と、結合する事になつたかである。是は私の一つの假想であるが、人と天上との交通を説くのに、瓜や豆の蔓の極度の成長と、是を梯子として往來したといふことが、可なり夙くから用ゐられた一つの趣向であつた。一方に野菜はちやうど此季節の初物であり、殊に瓜類は夏の神と

縁が深く、之を七日の節供の缺くべからざる供物として居た爲に、自然に兩者の間に聯想の橋を架けたので無からうかと思ふ。

今一つの繋がりには、犬飼といふことが算へられる。犬と羽衣との關係は前に擧げた鹿の助言も同様に、最初はたゞ單なる動物の援助の一例だつたかも知れぬが、日本では既に近江の余吾湖の昔語りもあつて、犬が大切な役割をもつことになつて居る。さうして一方には支那で謂ふ牽牛星即ち彥星を、又犬飼星と呼ぶことは、少なくとも倭名鈔の昔からである。是にも何か特別の説話があつたらしいが、それはもう埋もれてしまつて、たゞこの二つの言傳へを、混同せしめる因縁になつて居るのである。

御伽草子の天稚彦物語は、羽衣とは反對に人間の美しい少女が、天上に嫁入する説話であるが、其結末にはやはり月に一度と男神の言ふのを、一年に一度と聽きちがへて、怒つて薦を投げたら化して天の川となつたといふ條がある。即ち信州の七夕昔話のアマノジャクの中言も、起原は四五百年前に遡り得るのである。肥後の天草の犬飼さんが鰻といふこ

とも、やはり此趣向の系統に屬する。妻のたなばたひめが別れに臨んで、月に三度は逢ひませうと言つたのを、聞きそこなつて三年に三度とやと答へたので、それから七月七日にしか逢へなくなつたといふ點は、即ち亦天稚彦の草紙と同じであつた。或はこの犬飼が妻の逃げ去るのを妨げる爲に、其羽衣を畠の土の中に、埋めて置いたといふ話も天草にはある。それを七夕さまが畠打をして居て見つけ出し、すぐにそれを着て天の川の向ふ岸へ飛んで行かれたといふのは、まことに農民らしい空想であつた。信州の多くの田舎にも、以前は多分斯ういふ類の笑話が、出來て盛んに語られて居たものであらう。

(俳句研究三卷八號、昭和十一年七月)

『山郷風物誌』

一

野獸の生活に興味をもつて居る人は、信州にも八木貞助君等がある。鳥の生態観測を以て學界に大きな貢獻をして居る川口孫治郎君も、その日記を見せてもらふと、獸の話の聞き書が鳥類の記事と半々にもなつて居る。かく申す自分なども、動物園以外で見たのは狐と兎だけといふ程度の平地人であるに拘らず、小學校時代に山の部落から來る三四人の少年の、鹿や猪の話をよくする者があつた御蔭に、知らぬ間に可なりな野獸黨になつて居る。獸の話をする御客はいつでも私の家では長く引留められ、次には必ず本を書くやうに勧められる。早川孝太郎君の「猪・鹿・狸」は、少數ながら非常に良い讀者を獲得した一

書であるが、是も最初は朝日新聞に載せてもらふ計畫をして、それが中止になつて單行本が出来たのである。同君の「三州横山話」、小池直太郎君の「小谷口碑集」のやうに、力を入れて獸の記事を録したものが他にも有るが、純乎たる獵人の話柄のみを以て、一卷の書を成した早川君の例は空前であつたらうと思ふ。長尾宏也君の「山郷風物誌」はその第二の企てであるが、是もやはり自分の勸説によつて、纏めて見る氣になつたと筆者は謂つて居る。はつきりとした記憶は私には無いが、是だけの資料の存在を知つて、勧めずに居られた氣づかひは無いから、其通りであらうと思つて居る。

二

長尾君とは逢つて話をした機會が甚だ少ない。其爲に書中に述べてある事實に、初耳の種が多く、たゞの讀者になつて之を楽しむことが出来るのは、何が仕合せになるか知れぬものである。其中でも殊に愉快な部分、一人で知つて置くには餘りに奇抜な事實は、信州

遠山の境の幽谷では、秋に入つて猿の食物が分外に豊富なところから、參河と遠江と甲州との猿の群が、こゝへ遊びに来て長逗留をして行くといふ一條である。猿の言葉にも國々の方言があつて、土地にはどうやら是を聞き分けられるといふ人が居るらしい。少なくとも信州の猿どもの、アイエー・アイエーと啼くのは「敵が來た、用心せよ」を意味し、モア、モアといふ聲は大丈夫、安心をするがよいといふ親猿の表現であるといふ。平野の我々には想像も出来ない知識である。

信州は昔から、不思議に猿の逸話を多く知つて居る國だつた。たとへば私たちの小學時代の科外讀本に、夜深く子猿が獵師の家に忍び入つて、爐の火で手を温めて死んだ母猿の疵を撫で居る。その光景を隙見して、感動して狩の業を罷めたといふ話なども、たしか下伊那郡での出來事として傳へられて居た。猿が命を救つてくれた恩人の兒を囨にして、大鷲を捕へ殺して其羽を禮物に贈呈したといふ、親に取つては誠に有難迷惑な報恩譚、それから又烏を蔓で縛つて谷川にはふり込み、鶉飼ひの眞似をしたといふ滑稽な話なども、

他では折々は聴くが、やはりその昔信濃國で、誰かゞ遭遇した實驗の様に、談つて居る者が多かつたのである。甲信參遠の猿の群の往來などは、是等と比べて見るとずつと新らしく、又勿論實在性も多いやうであるが、それが世間話として現代に到達した、過程に於ては異なる所が無ささうに思ふ。即ちさういふ知識の存在は、可なり込入つた社會的現象であつて、之を單なる動物學上の事實として取捨鑑別することは、自分たちにはもう出來なくなつて居るのである。

伊那の遠山では猿の聲を聴いて、此話を胸に浮べる者は今でもまだ少なくないであらうが、さて最初に誰が猿の方言の差異を確かめたらうかといふと、多分はもう苔の下に睡つて年久しい話すきの老翁などが、責任を負はねばならぬことになるのであらう。しかも山の獸の折々の舉動に、無關心であり得ない心持、それから雪降る冬の夜が長く、ヒジロの周りの明るさ暖かさが嬉しくて、新聞や歸郷兵士が如何に珍らしい世界の話柄を持込んで來ようとも、尙それのみでは彼等の夜話は完成せず、一度は鹿猿熊狸等の不思議なる生活

ぶりに、問題向けなければ氣が濟まなかつた、大昔以來の古い習はしだけが、まだ此あたりには残つて居たのである。

三

自分などの想像では、斯ういふ世間話も現代のニウスと同様に、足無くして遠く走り、巧みを施さずしておのづから偽るが故に、是が平凡化と誤聞とを防がうとすれば、絶えず新らしい觀測を以て、次々の種を補給する必要があつた。それが出來なくなつて山の話の零落したことは、神話が今日の童話になつた事情とも稍似て居る。信州は如法の山國であつたけれども、人が賢い爲にこの環の輪は存外に早く切れた。僅かに最も靜寂なる片隅の山小屋に、上代教育法の痕跡を遺留して居たのである。近頃少しばかり入用があつて、猿に關する此地方の少年の知識を、集めて見て貰はうとしたことがある。ところが精確に今から五十年前、百五六十里を隔てた田舎の小學校の日なたぼつこで、もしくは貧しい

家の夜の炬燵で、幼ない自分が耳を傾けて聞いた話が、さもくそれから以後に突發した事件のやうに、山近き甲信の村里でも語られて居たのである。たとへば闇夜に路傍の樹の蔭で、二人の旅人が休んで煙草を吸つて居る。火を一つ御貸しなすつてと、煙草をつめながら近よつて行くと、うらうと唸つたので御犬であつたことが判り、足を空にして逃げて来たといふ話。又は一匹の送り犬に袖を咬へられ、怖ろしかつたけれども岩の後に引かれて行くと、やがてえらい足音をさせて、旅狼の大きな群が通つた。それで始めて危難を救うてくれたことを知るといふ話。是などは共に八つ九つの頃から自分も聽いて居る。狼の御産に産屋見舞うぶやみまひに出かけたといふ話は、奇抜だと思つて注意し始めたが、やはり中部から關東にかけて、谷間に在る村ならどこでも之を説き、しかも何村の何某の家でと、歴史として傳へて居る例も三つや五つでない。喉に骨を立て、通行人に頼んで抜いて貰つた狼の話に至つては、分布も更に弘く、起原は遙かに一千年外に遡つて居る。又村々の神主は白衣びやくいの左の袂に、小さな鈴を入れて墓に葬る習はしがあつた。深更に家の外の阪路に鈴の音

がするので、不審に思つて戸の隙から覗くと、狼がその死骸を掘出して、山の方へ曳いて行く所であつたといふやうな話すら、信州で聽く以前に武藏秩父、それから備中の或地方にも、寸分ちがはぬ口碑のあることを私は知つて居た。同じ土地では又かといふ様な話でも、新たに持込まれると聽く者は身ぶるひする。又は面白くて當分は受賣する。その隔絶があるばかりに、古臭くなるまで獸の話は流布したのである。さういふ中に在つて續々と新らしい事實を見つけ、少しでも人のまだ知らない世間話を世に供與しようとしたとすると、其態度は我々の學者教授も異なる所は無い。以前の信州は人に知られず、片隅にさういふ教育機關を持つて居たのである。どうせ人間だもの、折々は最初から見そこなひもする。それは其次に出る世間話で訂正すればよろしい。兎に角にその源頭の泉の水が、全く涸れ盡してしまはうとするのは惜しい。

四

をかしく又は物凄ければ、うそでも語らうといふ心がけは排斥すべきだが、之に反してたとへ間ちがへだらけでも、眞實を説かうとする志しさへあれば十分だと思ふ。それが結論とはならぬまでも、暗示としては役立つからである。けだし野獸の社會には、大きなフオレルやファブルはまだ現はれて居ない。無識な山郷人だけの知つて居る雑話中にも、行く／＼争ふことの出来ぬ自然の法則を、見出し得ないとは誰が斷言しよう。又しても猿の話に戻つて来るが、彼等の群の中に立派な首領の有ることは、可なり古くから我々の間には知られて居た。それが近頃になつて本土の最北端、下北半島の山地に於ても、今尙現實であることを聽いて來た者があり、又東京に近い筑波山の峯續きにも、似たる話の残つて居るのを報告した人も有る。信州南境の山地に類例を存するのは恠しむにも及ばぬ様なものだが、唯この話だけは一段と具體化して居る。猿の頭目をサキヤマと謂ひ、その次の有力者をソヘサキと謂ふことは、自分たちには非常に面白い。サキヤマは本來樵夫の親分のことであつた。不安多き山子等の先頭に立つて、神を祀り又方向をトしつゝ進んで行く

役であつた爲に、此名が出来たかと思ふが、林業辭典などを見ると、今では至つて軽い意味に、たとへば渡し場の船頭と謂つたり、小角力を關取と呼びかけたりする様な濫用が行はれて居る。その本来の内容が、却つて猿の社會に於て保存せられてあつたのである。猿のサキヤマには時あつて牝も居るといふ點は、群の生活を研究せんとする者には、頗る小さくない事實であつた。單なる體力の偶然なる優越が、或一頭にサキヤマの地位を獲せしめたか。はた又配偶期に於ける盲目な争闘が、自然に族長のやうなものを發生せしめるに至つたか。威壓が萬能であつたか但しは又、生みの親の愛情なり老齡の經驗なりが、彼等の指導者としての適否を決したのであるか。原因は一つか又は複合であつたか。少なくとも日本の猿については、今日はまだ些しも明かになつて居らぬのである。信州の猿サキヤマは、群を代表して他の群の代表者と戦ひ、失敗すると其地位を逐はれると謂はれて居た。是だけを聽くと、膂力が唯一の資格のやうにも思はれるが、猿に自ら語らせて見ぬ以上は、さう容易には退職の理由をきめられまい。疵痕の多い老いたる孤猿が、淋しくさま

ようであるくを見て、或は人間らしいロマンスを空想して見たかも知れぬので、彼等はたゞ老いて夫婦生活の熱情を失ひ、乃至は組織統制に對する政治的興味が淡くなつて、斯うして終りを取る習性を持つて居るものとも、想像し得られぬことは無いのである。

五

所謂一つ猿の心細い生活の起りに關しては、私も前に放送などに於て、説いて見たことがある。彼等の社會に於ては食物の争奪が、人間よりも一段と險惡である故に、たまく分配無き生活の氣樂さを體驗した者が、其他の危險を忘れて拔驅けの功名を志ざし、末には仲間に憎まれて愈々群に遠ざかり、一人でよく太つて又よく撃たれる。さういふ話は越中などでも私は聽いて來て居たが、伊那の遠山あたりの同情深い觀察によると、原因はただこの他にも有つた。理由はともあれ會て一たびはサキヤマの威風を輝かして居たものが弱つて其地位を去つて孤居する例もあつた。或は母猿が我仔の飢を見るに忍びず、仲間の

仔猿の食を奪つて遣ることがある。それが見つかること甚だしくいぢめられる。さうして群の中にその仔は残されて、一人で逐はれて行く場合も折々は有るといふことである。現實の見聞で無ければ、斯ういふ點までは知られて居るわけが無いと思ふ。

しかも此類の母性愛の實例が、一つの世間話として流布しようとする傾向には、早くも誇張と修正との警戒すべき危險性が含まれて居るのである。小猿が夜更に獵人の家に忍んで來て、爐の火の温みで母を煖めたといふ話なども、虚構の小説としては趣向も乏しく、噂の成長ならば元は此まゝであつた氣遣ひが無い。阿會沼の鴛鴦の話も同じことだが、人は鳥獸と同質の精靈を持つて居らぬことを知り切つて後まで、尙後者の荒々しい生存の中から、何とかして人生の哀話を讀まうとして居たのである。熊が大力で、千斤の岩を押し上げ、澤蟹を仔熊にあさらしめるといふ話があると、次には狩人を見かけて思はず其手を放し、岩の下敷きになつて其子が潰されたといふ事件も傳へられ、或は銃丸で打抜かれて死んでしまふ迄、岩を支へた手を放さなかつたといふうそらしい出來事も傳はつて居る。彼

等の穴籠りは此書にもある様に、冬の三月の間何も食はずに睡り通すのだが、それは出来ない事と考へた者が、蟻を掌にすり潰して是を嘗めて暮すといふと、早くも熊の穴に落ちて其掌を嘗めさせてもらひ、命が助かつたといふ人間も現はれて來れば、そこに家庭が生じて熊太郎といふ毛だらけの子が有つたりする。長くもて囃して居ると何になるか判つたもので無い。山で發生した話も筍や山獨活のやうに、少しでも若いうちに賞玩するのが何よりである。ところが一つ家や狩人は以前は今よりも多かつたけれども、そこへ訪ねて行く者が始めから奇談を所望して居た。あまり有りさうな話は亭主も遠慮して、之を珍客に進めないのが普通であつた。やつと此頃になつてそれを大切にする者が多くなると、惜むべしそれは早残り少なである。幸ひにこの近より難い僅かな山地だけには、前に掲げた一二の成書以外、上伊那では「露原」北參河では「設樂」といふ小さな雑誌があつて、我々の知友が別々に山の住民をして語らしめて居る。是が同一事件の流傳で無いことを確かめ得る間に、私は寧ろその若干の齟齬の中から、背後に隠れて居るものを概括して見たいと

思つて居るのである。此意味に於てはたつた一つの土地に記憶せられ、他ではまだ聴いたことが無いといふ話に、却つて力強い暗示が有るとも言へる。たとへば盲人を雇うてマセ棒を敲かせ、夜どほしタン／＼と山の猪鹿を逐はせたといふなどは、寧ろ有りふれた事實であつた爲に、之を説く者が無かつただけで、或土地一回限りの歴史ではあるまいと思ふ。按摩も用が無く音曲では尙更食ふことが出來ず、しかも目くらでもやはり活きなければならぬとすれば、安壽津志王の母で無くとも、斯ういふのがせめて似つかはしい彼等の職業であつたらう。今まで氣づかずに居たが哀れな話である。

六

曾て人生の最も平凡であつたものが、僅かな期間を隔て、回顧して見ると、もう珍らしく且つ胸を拊つやうになつて居る例は、現代は殊にその繁きに堪へない。あらゆる人間の隠れ埋もれて行く生活は、如何に微々たるものでも皆傳へなければならぬといふ考へが、

郷土の隅々にまで行渡つたのも自然である。但し長尾宏也君の一著のみは、さういふ種類の最初の記録と言はうよりも、むしろ記録せらるべき最後のものゝ如き感じがする。著述といふやうな我々の側の事業では無くて、寧ろ表現とか主張とか名づくべき、向ふ側のしぐさが元になつて、出て来たやうな印象を興へる。筆者が都の方から入つて来た旅人であるにも拘らず、山に身を置き山人の心持に、同化しきつて居る結果だと私は思ふ。在來の書物に其類を求めるならば、宿屋温泉などに頼まれた案内記、もしくは村方の歎願書といふもの以外に、實はあまり多くの例は無いのである。そんなものと同視するのは勿論ひどい話だが、郷土に代つて一代の人を楽しませ、又は賢くしようとしたやうな記述は、實は今までは絶無なのだから致し方が無い。其上にこの書が亦彼等と共通な缺點も持つて居るのである。百年後世の批判を待つまでも無く、我々友人が見ても氣のつく點は、長尾君が南は臺灣の蕃地から、北はオホツクの海の邊まで、山といふ山は巡り視て居るにも拘らず、未だ風土の變化に十分の認識を下し得ず、熊や猪狼はどこの山間に行つても、全國均

一の生活ぶりをして居るとでも思つたものか、屢々場處を記入せぬ描寫を試みて居ることは、ちやうど田舎者が我居住地の歴史を以て、日本全農村の事情と斷ずるとよく似て居る。今一つの弱點は、話があまりに面白く文章に熱があつて、幾分か人を動かし過ぎること、是なども一つ家の爐側に昂然と眉を聳かして、兒女や若者等の愉悅して耳を傾ける有様に、無上の満足を感じて居た老翁の態度などゝ近くはなかつたらうか。さうした方が聴く者はよく覚えてくれ、又行く先々で受賣もしてくれるであらう。其代りには誇張せられ曲解せられて、後には間ちがつた話になる危険も警戒しなければならぬのである。出来るだけ良い讀者を捜すこと、それから又同じ種類の報告書の、各地獨立に數多く現はるゝを期すること、是より以外にはそれを防ぐ途は無い。缺點の無い書物などは永遠に此世に出ては來ぬ。そんなものを待つて居たら、知らぬ間に山の生活は、平地と同じになつてしまふかも知れぬ。

(心境一卷五號、昭和九年八月)

『木曾民謡集』

一

民間傳承の會の會報に、近頃私が提出して置いた民謡の分類案を、最も早く採用したのが木曾民謡集である。それに序文を書くといふことは、自分にとつても好個の記念になる。民謡などを集めて何にするかといふ疑問は、今でも折々聴き、又さう簡單には答へ得られない難問だが、木曾の生活に體驗ある人々だけには、必要は既に討議の域を超えて居る。歌に依らなければもう知ることの出來ぬ昔が、年と共に多くなり、それも汽車自動車や電車の速力を以て、見る／＼逸散し又變化しようとして居るからである。理由は此本を讀みながら、もう一度靜かに考へて見ることゝして、先づ無くなるものを取留めて置かうとい

ふ。この率直なる態度にも同感をもつことが出来る。私の見る所も正しいか否かは知らぬが、とにかくに他日の讀者と共に、有る限りの多くの利用價値を、この中から見つけ出さうといふ趣旨の下に、茲に若干のやゝ新らしい解釋を試みる。さうして是が又編纂者の辛苦に對しての、殊に適切なる感謝の方法だとも思つて居るのである。

二

木曾は何人も知る如く、珍らしく大きな天然の渡り廊下であつた。國のまん中といふ語が是くらゐ精確に、當つて居る土地も他にさう多くない。風・渡り鳥・水の流れ以上に、遙かに雄大な文化と名づくるものが、古來たゞ此一筋を貫ぬいて南し又北して居たのである。眼に見る形としては明け暮れの旅人、或は馬駕籠などの雜然たる繋がり過ぎなかつたけれども、それが暗々裡に負搬して來たものは、系統があり層があり又時代色があつた。廊下である故に永く一處に止住せず、しかも大海の航路や曠野の足跡とはちがつて、常に

左右に在るものと、何等かの交渉をもたずには行かなかつたのである。氷河が雪を運び寒さを移し、且つ色々の山の小石を持つて來るやうに、隠れて残り留まるものも捜すならば必ず見つかる。現に古きを誇りとする村々の寺でも名家でも、何れも或時代のデブリスでないものは無かつたのである。

あらゆる一國の文化の中でも、歌謡は脚あつて衝を走る如く、流行の特に速かなるものと考へられて居る。新らしい音律と言葉は忽ちに古い好みを壓して、背後に押し遣り忘れ去ることは、今日の常の法則とさへなつて居る。しかも我々は前代の木曾の驛路に、森閑とした夏の眞晝があり、更に又長い淋しい冬の爐端の夜が、あつたことを考へて見なければならぬ。天下に名を知られた谷底ではあるが、木曾の住民の大半は旅と關係が無く、世間をたゞ側面から眺めて、何處へも動かない産業に携はり、彼等は彼等だけの生活興味をもち、又独自の歌の需要をもつて居た。さういふ人たちが時あつて町に下り、もしくは草刈り畠打つ手を休めて、目を留め耳を傾けて居たさまざまの世の音なひの中から、或もの

は笑うてやがて忘れ、又或ものは覚えて来て、永く家々の語り草として居たとすれば、是も亦一種眼に見えぬ木曾の關だつたのである。その選擇の間からでも窺ひ知ることが出来るのは、諸君御先祖の立場であり、乃至は趣味であり情操であつた、といふことは果して強辯であらうか。仲仙道の人通りがどの様に肩摩轂撃であらうとも、こゝに住む民に歌を愛するの癖が無く、且つそれを自由に活用するだけの才能が無かつたならば、斯くまで充實した木曾民謡集を、今頃集めて世に傳へるなどいふことは、まづ不可能であつたらうと私は思つて居る。

三

況く日本の民謡史を考へて見ようとする者の爲にも、此書は偶然に大切なる資料を供して居る。木曾の一水域には限らず、異郷人との接觸の多い土地では、別に民謡の新たなる用途が、二つは少なくとも附加へられるのを常として居た。一國全體としての發達の上に

も、此傾向は可なり明かに看取せられるが、その一つは踊り歌で、是は眼に見えぬ邪靈を追却する爲に、人の元氣を統一する必要から、段々と數多く又面白くなつて來たらしく、他の今一つは酒盛り歌で、此方は見知らぬ人と親しみ、互ひに心を置かぬ盃を取り交す爲に、持つて居らねばならぬ勸酒用のものであつた。勿論後々は歌そのものゝ面白さに絆されて、用も無いのに鼻唄に之をうたひ、もしくはわざ／＼其機會を設けましたが、本原に溯つて見ると、木曾が東西交通の衝であつたといふことが、夙にこの二種の民謡の必要を認めさせ、又此頃のやうに之を盛んならしめたのである。今でも信州人がよく酒を飲むのを、寒いからだと無造作に言つてのける人もあるが、もつと寒い土地でも一向に飲まない處もある。つまりは木曾の衆が踊りを自慢にすると同じく、寧ろ面白かつたから流行つたといふ方が自然で、是を面白くしたのは乃ち又歌の力であつた。利害得失は教育者に決してもらへばよい。とにかく是が郷土の現實の歴史と、深い交渉をもつて居たといふだけは、斷言して妨げが無いやうである。

四

それから今一つ、民謠が女性に與へて居た感化の、重要なものであつたことが考へられる。踊りにも酒盛りにも、婦人は未だ會て發起人となつたことはないけれども、彼等が歌を愛し又之を理解する慧しさに至つては、恐らく男子にも立ち優るものがあつた。さうして彼等の智能が弘く、感情が豊富となるにつれて、次第に美しく且つ含蓄の多い民謠が生れて來たのである。新らしい歌の作者なり取次人なりは、多くの場合には男であつたらうが、其背後には黙つて聽いて居た異性の選擇が、可なり敏活に指導して居たことは、小鳥や鳴く蟲の社會も同じだつた様に思はれる。この進歩の段階が、土地毎に後れ先だつて居たのである。さうして又個々の民謠集の中から、大よそは其歴史の古さ新らしさをも察することが出来るのである。たとへば外來の流行唄に心酔して、不斷にもよそ行きにも、仕事唄にも又鼻唄にも、すべてさういふ新らしいものばかりを、採用しようとするのも一つ

の時期である。さうかと思ふと踊りや酒盛りの面白かつた歌を記憶して、ちがつた場合にも歌つて見ようとするだけの才覺は示しつゝ、なほ一方に土地に生れた昔風の歌でも、好いと思つたものは何時でも取出して、しみじみ味はつて見るまでの餘裕と同情とが、備はつて居る郷土も稀なりとしない。木會などは多分、その第二の方の例であらうと思ふ。斯うしたやゝ亂雑にも近い新舊の交錯こそは、祖先の心意を探り求める、大切な一つの手掛りであつたのである。折角苦勞をして是だけのものを集めて置きながら、これを無意味の偶然でもあるかの如く、見過してしまふのは惜しいことである。

現代の世相は歌が職業となり、歌はぬ女性といふものが日に増して多くならうとして居る。彼等をもう一度聲高く歌はしめることは、いくら靜かな木會の谷でも、恐らくはもう望み難いことであらうが、是が爲に以前我邦の民間文藝に參與して居た人々の、優雅なる心しらびまでを、跡も無く忘れてしまひたくはないものである。私などの見た所では、民謠集の使命として、是以上に意義の大きなものは他には無いと思ふ。如何なる記録の上に

も書いてない昔、しかも切々として我人の共に知らんと欲する祖先の生活が、僅かながらも此中からは窺はれる。もしも此點に讀者を心づかしめ得なかつたならば、勞多かりし三年有半の採集事業も、必ずしも成功とは言はれまいと思ふ。

(昭和十一年七月)

新野の盆踊

一

「踊の會」と行書で三字、斜めに紅く書いた弓張提燈が三つばかり、それから少し離してバケツに清水、白い茶碗を副へて臺の上に乗せてある。時々踊子が出て來てはこの水を飲むのである。

信州新野（よの）の町の盆踊は、こんな簡単な装置を中心にして、一つの場合をぐるぐると廻つてあるく輪踊の一種である。輪とはいつても路幅が狭い故に、すぐに小判形になつてしまふ。縣道に指定せられる以前には、まだ左右に若干の空地があり、月何度の市もこゝに立つたので、今でも市神様の小さなフクラと、制札場とが残つてゐるが、常店が盛んにな

つてからそんな廣場の必要も無く、兩側の人家は町並一杯にのりだして、おまけに小溝が通してあるのだから、踊のためには如何にも窮屈になつて來た。

もとは道路のまん中に石燈籠が一つあつて、その周圍をまはつて踊つたさうだが、それも取拂はれて、今は鎮守の森の鳥居の脇に、持つて行かれてさびしく立つてゐる。固苦しい駐在が勤務して居る年は、この頃でも交通整理だ取締りだと、やかましいことをいつて困らせるが、隣の村役場へは山坂が三里、三河とも遠州とも、立派な山脈を以てしきつてある。憚りながら日が暮れてから後まで、旅行運送に使用するやうな、そんな平凡な道路とは道路がちがふのだ。つまりは日中は縣道、夜分は踊場として利用する様に、天然がこれを認めて居るのである。

昔に比べて物足らぬことは、獨りこの路幅と石燈籠ばかりで無かつた。月送りといふ當節の風習は、節季を忘れたといふ口實を防ぐにはよからうが、踊る人たちには随分と勝手が悪い。十五日だといふのにまだ青々とした夕空から、半片の月がけし飛んで山に入らう

として居る。闇の中で踊るのでは實は我々の踊で無い。それを悲しむ情が暗々裡に動機となつたものか、この閑靜な山の宿には、少し似合しからぬアーク燈が、光々として高く輝いて居る。こんな山家やまがですが電氣だけはと、自慢の様にいつては見るものゝ、これは調和で無く、寧ろ妥協と名づくべきものであつた。

繪にあるやうな菅笠や頬冠りが、この新らしい光に照されてはならぬことは知れきつた話である。娘だけにはせめて手拭でもと思ふやうだが、それさへ西班牙風の大きなセルロイドの髪飾などを、きら／＼と光らせて踊つて居る。男の頭も半數はむきだしで、他の半分が烏打か麥わら帽である。不思議に書生らしい物腰の青年が多いのは、一般に讀書が盛んであるのと、今一つは近年のテニスの流行が、無意識に影響して居るのであつた。

踊の會といつたところで、別にその様な團體を設けてあるわけでは無く、單に世話人等の新らしい趣味である。大凡この山奥の一盆地に生を楽しむ人の限り、それこそ文字通りの考若男女で、小は小學校へ上つたばかりの少年少女から、兄姉叔父叔母は申すに及ばず

親か祖父かと思ふ年輩の者まで、仲よく同じ輪を作つてしみじみと踊つて居る。家々の吉凶、産土うぶつちの祭、田植とか稻刈とか、春秋の行事も数多いが、これだけ完全なる共同の作業は、恐らくこの土地でも他にはもう例があるまい、また新規に始めようとしても始まるもので無い。何か知らぬがよほど大きな隠れた力が、この久しい仕來りを保存したばかりか更に是を尋常化してしまつて、寧ろ踊らぬ者を怪しましめるばかりになつてゐる。他所から來た嫁と年とつた女だけが、普通は踊の仲間に加はつて居ないのを、近世の變化の如く説明した人もあつたが、必ずしもさうは信じられない。

盆の十六日踊らぬやつは、ねこかしゃくしか花嫁か

といふ歌も方々にあつたり、

子持ち女も出てをどれ

と歌ふ村々も多いのを見ると、母とか嫁とか名のつく者には、踊らぬ理由が昔からあつたのかも知れぬ。何れにしても彼等も輪の中に入らぬといふのみで、決して單なる見物人で

はなかつたのである。

二

新野の盆踊の目立つた特色は、扇を盛んに使ふこと、太鼓その他の樂器類を、ちつとも用ゐないことであつた。私などの郷里の村では、日が暮れるともうちつとして居られぬ様な、ドオン／＼といふ音が始まり、それが夜の更けるに従つて一段と高く響いて來るの、何村ではまだ踊つて居ると、よく年寄のつぶやくのを聞いたものだが、こゝでは人よせの必要などは少しも無く、太鼓は無くとも宵のうちから、町中が踊になりきつて、聴えるものは唯集まつてくる人のさゞめきばかり、歌は随分高い聲で歌はれても、案外に遠くまでは届かぬもので、寧ろ家々の常の夕方よりも、森閑としたものであつた。

しかもさういふ静かなる夜色を帯びながら、不思議な位に誰も彼も興奮して居る。いゝ踊になりました。珍らしい大きな踊だ。もうこちらは橋まで來て居る。向ふは伊豆本の前

まで行つたなど、口々にそんな話をして小判形の輪の成長を悦んで居る。さうしてついでと物かけへ消えてしまふのは、大抵は踊らうといふ人々である。自分たちは出来るだけの空気をかき亂さずに、踊る人の氣持といふものに觸れて見たいと思つて、殆ど抜き足をして輪の外をあるいて見た。江戸で昔見物左衛門など、名づけたのは、恐らく我々の如き遠慮深いものではなかつたらう。我々は批評どころか、他所者だといふ顔もしなかつた積りだが、それでも視線の出逢ふたびに、はつとするやうな眼を時々見たのは、是非も無い近代人の敏感であつた。そこへ行くとき小兒だけは單純なもので、うま味は無くとも覺えた通りの型で、一生懸命に足を踏み扇をかへして居る。裾短かの筒袖に三尺帯を垂れた後つきが、この踊の爲に改良せられたかと、思ふほどよく似合つて居た。よく見るとその中にもやゝ巧者なものと不細工なものがあつて、折角新しいポツクリなどを買つてもらつても歌とは筋かひに足を出したりする兒がある。そんな時には必ず母親らしいのが後に來て居て、氣をもんで色々世話を焼く。さうかと思ふと二人か三人扇を固く握り、圓い眼をし

て同じ年頃の子供仲間がまはつて來たら、今度は入らうと身構へて待つて居るのがあつた。これが先づなつかしい見ものであつた。

全體に踊の輪は、踊子の年齢によつて區切られて居るやうであつた。踊子と呼ぶのもつかしい位な親爺までが、やはり古くからの仲間があると見えて、知つた者同士でかたまつて踊らうとする。若い人たちは尙更のことで、よつほど頓狂なのが笑ひながらにでも、一人異性の中にまじるといふことは少ないやうであつた。そればかりか帯の格好や衣類までも大よそ同じ様なのが一所に並んで居る。揃ひの衣裳では無いけれども、白の浴衣の一隊の間には、自然に黒を着た者はまじつて居ない。それがまた向合つて互に目を悦ばしめる彩色ともなれば、音頭と附け歌との面白い波動を作るかとも思はれた。

年をとつた人たちはいづれもちとばかり飲んで居る様子である。なるほど輪の出來かけには僅かな決斷力が入用らしいが、それから後の成長に至つては何でも無い。最初はまづ子供連がどや／＼と入つて來たと思ふと、それに紛れてもうそちこちに美しい色どりが花

などの如く咲いて居る。おくれて来たか又は心のおくれた者が、扇などは深く懐に隠して、さも見物の如き顔をして立つて居ると、どここの地方でもよくある様に、前を通る友だちがそれはく亂暴に、袖などを持つてぐいと引く。引かれてよろ／＼として輪の中へ轉げ込んだと思ふと、その次の足ではもう笑つて踊つて居るのである。

また踊らずには居られる道理が無い。僅か三晩の休に五里七里さきの工場から、日和下駄で戻つて来る人があるのである。昨日の夕方も落合橋を渡つて、赤や桃色のメリンスが急いで行く、隣の村の見物かと思つて、近よるのを見ると土ぼこりが汗を染めて居た。風呂敷包に二本も洋傘を結はへた娘がある。こんなに苦勞をしてまで、盆には踊りに還つて来ねばならなかつたのである。

三

歌で踊の甲乙を談らうとするのは、大砲の音で戦ひの勝負を判断するよりも、尙一段と

適切で無いと思つた。新野などでは太鼓が無いために、歌を止めては拍子を取ることが出来ず、始終誰か大きな聲を出して居るが、あまり澤山にその方へ注意をひかれることを欲しないのは、歌の平凡で数が少ないのを見ても察せられる。それを何べんでも飽きずにくり返して居るのは、即ち目的の文學以外に在つた證據である。土地で出来たかと思ふ歌は新らしくてまづ、

三州振草安いな煙草、一分百出しや五把くれる

などいふ古風なのは、もう歌ひだす者も無くなつて居る。

踊子の興味は文句よりも囃しの方にあるらしく、同じ囃しを繰返すときに、却つて活々とした感動が現はれる。そんなら奥南部の盆踊の

なにヤとやれ

なにヤとなアされの

のやうに、夜どほし一つ文句を唱へて居てもよろしいかといふと、それでも差支へるのは

個々の踊歌に、別に一種の號令約束の如きものが、自然に具はつて居るからである。始めてこゝへ來て知つたことは、踊の始まり又は中程でも、何だか調子が亂れて統一の保たれぬ懸念がある時は、それしつかりなどいふ代りに、

そろたそろたよ踊子がそろた、稻の出穂よりまだそろた

を歌ふのである。つまり是が巧妙なる暗示であつて、特にこの一首を名吟と感じた爲で無く、初夜には兎角この歌の必要を生ずるのであつた。

また一廉の聲自慢が、妙にもち／＼として歌ひ出さぬ時がある。さうすれば勢ひ他の者も遠慮がちになつて、少し間の抜けようとするのも無いではない。こんな場合の通例の氣轉は、

歌の切れまにちよいと出せ女子

といふのを歌ふことにきまつて居る。この歌の本來の下の句は、恐らく大分穩當でないものだつたらうと思ふが、今では文學的に改作せられて、

はやる吉田の女郎ぶしを

といふことになつて居る。そんな歴史には一切頓着せずに、その所謂をなごたちが一緒になつて、つゝましく歌つて居るのを見ると、却つて簡明なる一卷の盆踊沿革誌を讀むの思ひがあつた。

輪踊の始めと終りとを、こゝの人々は踊が出来る、又はこわれるといつて居る。それ程自然に踊の輪は成長し、又崩れて行くのである。所謂歌の切れ間があまり續くと、踊りにくくなつて端から退くこともあるが、大抵は少しづつ輪が細つて、末には淋しくなつて立止まつてしまふ。二つの輪が同時に出來て、ちがふ踊をして居ることもある。誰しも大きな群になつて踊りたいから、結局は聲のさえた方が歌ひ勝つことになるのである。

踊にはそれ／＼名前があり元歌がある。高い山と稱する上方の伊勢音頭に近いのもよく踊るが、一番人望のあるのは、コラセといふはやしで結ぶ音頭踊であつた。あれは何の、三十年ばかりも前から、流行つて來た踊です。折角遠方から見物においでた人に、もつと

踊がこわれる

色々の踊をお目にかけてはと、我々が辭退するのも聴かず、親切にあるきまはつて相談をしてくれる人がある。おれは忘れたなど、尻込する者を促がし、とにかく最初は五人で小體に踊りだしたのは大努力であつた。しかし同じく流行おくれといふ中にも、著しい階段があつた。大した勧誘を要せずに見る／＼同志者の加入するものもある。あら何とかを踊つて居るよと、寧ろ珍らしがつてどや／＼と入つて來るのがある。こらく／＼子供たちは入らずに置いてくれ。これは標本なのだからな、など、言つて居るうちに、とう／＼百人にも近い大輪になつて、いつそのこと踊つてしまつたものもある。さうするとまたその中から抜けだして、どうかこちらでなど、謂つて、その次の踊を見せてくれようとする。それが次第に評定が長引き、打合せに於て意見が二三に分れ、しかも僅かな連中にも氣の無い顔をする者があり、それを又やつきとなつて慨歎する者も現はれる。やたらに古い事を尋ねようとするのも、無理な願ひであるなど考へずには居られなかつた。

四

こりや何といふ踊だえといふ者が出て來る。あれを御覽。むかアしの踊だと。ふん、おぢいばかりで踊つて居る。こんな勝手な觀察がそちこちに行はれて居る。それには構はず何度でも踊を中止して、手がちがふの足がちがふのと論辯する者がある。ソレ能登はア居よいかア住みよいかアと、すこぶる誇張して振を示さうとする者がある。これももし確實なら新野の元の踊は、祐信師宣の時代などはずんと通り越して、寧ろ南大陸のコロロボレに近いものといはねばならぬ。一人の老翁は酔つてゐて元氣むやみによろしく、何でもいから早く踊らうとして、幾度となく歌ひだしては、またすぐ止めてしまふ。

あれはなアに、飲んでゐて騒ぐだけで、前から踊り手でも何でもなかつたのです。こんな事を自分の側に來て、説明をしてくれる人があつた。これも老人で孫の手を引いて居る。それよりもあの白髪のおぢいは七十二ですが、以前はよく踊りました。もう四十年近くも

踊るのを見たことがなかつたに、今晚は出て來ました。こちらのすんぐりした人は何兵衛さんといふので、これは年がもつと若い。わし位だ。あの腰つきを御覽なさい。昔は評判の音頭だしてしたなどいふ。この邊では音頭取りとはいはずに、音頭出しと謂つて居るのである。

色の黒い老女が一人、工場に居たらしい娘と共に見物してゐる。そつと横から見て居ると、圓い顔から一枚齒を出して、さも他念無く笑つて居るところは、何とか正宗の商標の上下を着た翁の如くであつた。あの踊は知つて居る者が少なうなつた。面白い踊ぢやつたと話して居る。踊よりも踊つた時代が、婆さんにはなつかしかつたのである。おばあさん踊つて見ちやどうかね、皆あゝして踊つて居るといふと、却つて後へ下つて腰をかけてしまつた。

さうからして居るうちに十二時に近くなる。子供も大分歸つたが、老人の方が餘計見えなくなつたやうだ。さうかと思ふとあの人は踊るまいと思ふのが、いつの間にか加入して居て、禿げた頭が時折電燈の光の下へ來る。宵には忙がしかつた附近の新盆の家から、一心に見て居る顔の數が多くなる。もうそろた／＼を歌はなくとも、さらり／＼と足拍子はよく合つて居る。踊はしゆんで來た。一年の内のもつとも平和な時刻だ。邪魔をしないでもう歸つて寢ようぢやないかといつて居ると、オイ踊らないかとだしぬけに、我々の一人へ聲をかけた者がある。色の白い横顔に、眼鏡をきらりとさせて、先へ／＼と踊つて行つた。

あれはさつき飯田から來た青年です。今までそこいらをうろ／＼として居たにもう踊つて居ると驚いて見て居る。この様子では駐在所はどうか知らぬが、學校の先生はきつとこの中で踊つて居るね。教へてもらふと何だかいやに面倒なやうでも、入つてさへしまへばどうにか踊れるのだ。さうして子供でさへ夢中になつてゐるから、きつと酔ふやうな氣持のものに相違ない。たゞ見物をして居るなどは本當につまらないと、獨り竊かに慨歎をして居るとも知らず、村の中にもやはり醒めたる人があつて、批判をして見たり解説したり、

寧ろ好奇心を以て我々の印象を探らうとする。幾ら山奥でも世の中はとくに近代だ。この古風の遺物と化するのも、もう遠いことでは無いだらう。

しかし流石に青年等は皆踊つて居る。昨日袴をはいて山路へ出てくれた代表者たちも踊つて居る。踊の會の主任見たやうに、色々世話を焼いて居た元氣な若者も、今は自分の踊だけに全力を注いで居る。帯を一尺も下へ落して、愉快な腰付をして踊つて居る。たゞ今晚はお客があるといふことを、丸きり忘れてしまへぬのが如何にしても氣の毒だ。我々の前へ廻つて来るたんびに、へゝ大いに遣つて居りますといふのもあれば、あるひはもつと思ひきつて、如何です先生も一つなどゝ、何か言葉をかけて通る者が多い。サアサアもう歸らう。さうでないとは本當の踊が出来ないから。

五

ほんたうの踊は十六日の晩だからと頻りに引留める人もあつたが、思ひきつて精靈より

さきに還つて來た。踊の三日目は完成であると同時に、また大歡喜との別れでもあつた。この夜の未明に踊神を送つてから後は、もう一切踊ることは出来ぬので、また一ケ年を待たねばならぬことは、天の川も同じであつた。今では二十日盆にもちとばかり踊るといふが、それは古法には反して居る。本來踊といふものが亡魂を送るために、催されるものであつたからである。

さていよいよ東が白むといふ時刻になつて、さアもう送らにやと長老たちが言出すと、どうか今一區切りだけ踊らせてくれと、若い人たちが頼むのださうである。送られるといふのはこの二年の新佛で、その家々に在つて歎く者も逝く者も、名残りを惜しむの情は一致して居た。しかし限りがあるから終りに輪踊をきりあげて、まづ市神様に一踊り、次には太子堂の前の橋のたもとに來て、庭踊といふ類の踊がある。昔風の章句が口傳へに残つて居る。それから引返して大村といふ字の境まで、この折は鉦を叩き、ナンマングーボを足拍子にして、踊りながら押して行くのである。行き着いた時には何發かの鐵砲を放すこ

となつて居る。

これが佛法以前からの亡霊祭却の古式であることは、この土地だけでは多くの論辯を要しないやうであつた。新盆の家では方々から贈つてきた色々の盆提灯をとす外に、特に切子といふ紙燈籠を製して、佛前に掲げておく。踊神送りの群はこの切子を託せられて、境に持出して焼棄てることになつて居るが、それに先だつて嚴重な式があり、九字を切り、唱へごとをして、刀を抜いてこれを二つに斬るのださうである。斬口の如何によつて年の吉凶を占ふ習ひがある。刀の役にも家筋のやうなものがあり、唱へごとも久しく口傳であつたが、それはたゞ四句の光明眞言の少しばかり崩れたものであつた。同じ手続きは大村の方でも繰返される。一方の境の神送りが到着して、切子を焼く火が燃えあがるを見るとひとしく、こちらも踊り出して外境の林の中まで、宿次の様にして送つて行くのである。或は昔の人には斯うして送られて去るものゝ姿が、あり／＼と目に見えたのかも知れぬ、それにしたところで佛道の新しい教が殆ど魂祭の解説を一變してしまつた後まで、新野

のやうに古くからの方式を保存して居た例も珍らしい。それといふのも山家の生活の心元なさが、殊に疫病その他の外來の災厄に對して痛切であつた結果であらう。定期の神送りは秋の末にも正月にも、また夏のかゝりにも色々あつて、今では一つ／＼異なつた説明が生れて居るが、よく見ると目的には格別の相違が無かつた。隠れた世界の生活の自由は、現世に住む者の爲には往々にして害であつた故に、斯うして時々分堺を明かにする必要があつたのである。香花飲食の供養を豊かにし、怖れて追拂はうとする者に向つて、また來年もござれなど、泣いて別れを惜しむのは詔ひの如く見えるが、如何なるわけかは知らず大昔の世から、多くの民族の間に同じ風習があり、中には自然にこの世を去つた靈魂のみならず、例へばアイヌのクマ祭や、もしくは我々の子供の蛙のおとむらひの様に、わざわざ亡霊を製造して置きながら、やはりこのラメンテーションの式を行つた例も多いのである。

新野でも今は十五日の眞夜中に、別に新盆の家々の魂送りをする。どうです御覽になり

ますかと謂つて起されたから出て見ると、早稲の葉にさわくと夜風が吹いて、爪先さがりの田の路は眞暗だ。小さな流の岸に人が集まつて美しい岐阜提燈を燃して居る。こゝでも念佛を申し刀を揮つて、切子行燈を二つに斬り、散米をして足早に戻つて来る。以前ならば初秋の満月に、空は照り山の木などもよくわかつて、今還つて行くなと思ふ心も明るかつたであらうが、今では里にばかり澤山の火が見えて、我々の信仰までが、もう方角のつかぬものになつてしまつた。

(東京朝日新聞 大正十五年八月)

(附記) 新野でもう忘れかけて居る古風の踊の一つに、スクイサといふのが特に注意せられる。此踊の名の起りは

ひだるけりやこそスクイサに來たに、入れてたもれよ一すくひ

といふ踊歌に在ることは明かだが、さて如何にして斯様な詞が、踊の歌になつたかはちよつと合點が行かない。南信以外の地に此名の踊のあることはまだ聞き出さぬが、

平谷では下の句が

たんと溜れよ一掬ひ

となつて傳はつて居ることが、下伊那郷土民謡集に見えて居る。歌の正面から解釋すると他には意味の取りやうもない。スクイサは飢饉年の救助小屋のこと、しか思はれぬのである。それがこの踊の歌として永く行はれた理由は、或は此土地でならばまだ尋ねて見ることが出来るかとも思ふが、私の想像では、天明とか天保とかいふ悲惨なる凶年の後に、數多の亡靈を慰め兼ねて生殘者の心の不安を散ずる爲に、斯ういふ悲しい歌詞の盆踊が始まつて、それが此あたり迄も流行つて來たのを、無邪氣に後々の人が記憶して居るのではないかと思ふ。前に海南小記の中にも掲げて置いたが、奄美大島でも昔怖ろしい大飢饉があつて、幼ない姉弟がいちご山に入り、山苺を探しまはつて居て餓死したことがある。その二人の亡魂が哀れな聲で、永く歌つて居たといふ歌詞が記録せられて居るのは、是も亦多分踊歌かと思はれる。乃ち踊はもとさういふ

宙宇に迷ふものを、送り出す作業であつただけでも、それには慰撫と同情とが必要であつた爲に、屢々其所作には此類の「わざをぎ」を伴なうて居たらしいのである。國堺の邑落の、嶺を隔てゝ生活事情を異にする處では、殊に外から來るものに對する警戒は密でなければならなかつた。新野に盆の踊の昔風が保存せられて居たことは、私たちに不思議で無いやうな氣がする。

信州の出入口

信州からの出口を、鐵道以外に十一ほど私は知つて居る。茲には記念の爲に、場處だけでも列記して見たいと思ふ。通つた時日はもう自分でも、忘れて居るものが多いのである。

- 一、下伊那の平谷から、矢矧の流れについて、惠那の上村小田子へ下る路。是は昭和十年の秋、乗合自動車で新道を通つて見た。最も新らしい經驗である。

- 二、次にはその平谷を南北に貫ぬいた三州街道。古い波合記の傳説を管理する、有名な岡船の航路である。但し私は北設樂の津具の方へ出てしまつたから、根羽と武節との間の三里ほどは知らない。稻橋までは足助の方から入つて見たことがある。

三、次には盆踊を見物した且開村の新野から、所謂三州振草へ越えて行く路。是もこの頃は乗合が通つて稍著名になつた。

四、次に天龍川東の小川路峠を越えて、遠山奥山を過ぎて行く秋葉街道。こゝを通つたのはたしか大正四年の紅葉の頃であつた。途中和田と山住とに一泊して、秋葉山の後へ出た。

五、それからずつと東へまはつて、南佐久の念場原から、八ヶ岳の裾野を若神子へ下つて行く甲州街道、平賀源心の虜になつて行つた路である。私が通つたのは昭和五年の、蓮華躑躅と郭公の季節であつた。國界の茶店では三年生の女の兒に、鹿に逢つた話を聽いて感動したことであつたが、今はもう其近くを汽車が走つて居る。

六、北佐久では志賀から上州の西牧へ越える、志賀越といふのを一つだけ知つて居る。是は何でもまだ若い頃のことであつた。こゝと併行する五つか六つの峠を、皆越えて見ようと思つたものだが、その計畫はまだ實行せられて居ない。

七、小縣郡では或年鹿澤の温泉に遊びに行つて居て、偶然に上州の嬭戀村へ越えてしまつた。碓氷以外にまだ重要な山間の交通路が、幾つか有るといふことに心づいたのは此時からであつた。

八、越後との境も、まだ二つより外は経験して居ない。その一つは中魚沼郡の片端を縫うて、松之山温泉に出る急傾斜の山路だが、是も昭和七年の紅葉の頃に、車で越えて見たが嶺上は薄雪であつた。

九、頸城で松本街道といふ糸魚川街道も、二十年ほど前に人力車で通つて居る。

一〇、飛騨は船津から平湯の温泉に入つて居て、阿保峠を徒歩で越え、初めて上高地の晩秋の山を見た。是は松本から直線に還つて来たといふ、船津の若い按摩の話に激勵せられたので、私の爲には多分最終の登攀だらうと思ふ。

一一、それから尙一つ、飛騨へは木曾王瀧川の上流から、益田郡の南部三厩といふ村へ越えて居る。是は明治四十年の初夏のことで、其時の紀行は既に本になつて出て居る。

この十一箇處の山越えの中で、八から一〇までの三つだけは、旅程の都合があつて外から信州へ入つて見たのであるが、それでもやはり入ると出るとでは、心持に大きなちがひのあることを感じて居る。まして久しく信州の内側に住んで、來ると還るとの差別に馴らされた者に、この二様の經驗の厚薄は、有る方が寧ろ當然である。しかも郷土を視る眼を新たにする爲には、先づその當然を認めて、更に或ものを附加へる練習をしなければならなかつた。記録は大體に入つて來たものに忠實であつて、端からこぼれて行くものはいつの世にも見落され、人も亦特に尋常の群の中に、まじつて異色のあるものゝみに注意しようとする。何も與へずして只獲られた氣遣ひは無いのであるが、實は其分は此方には不用であつた故に、無くしても氣が付かなかつたのである。同じ一つの峠を越える場合でも、僅か百歩の差で前へ行く者の、後影をも望むことが出來ぬに反して、向ふから來る者は片端から行逢うて顔を見る。是と似たことが大抵の郷土史研究にもあつたと思ふ。入口が即ち出口であつたこと、山の彼方にも古い信州が脈打つて流れて居ることを、氣づかぬ割據

ほど笑止なものはない。だからいつ迄もわかりきつたことか、用でも無いことばかりを問題にして居るのである。

汽車が専ら平原の都邑を訪れるやうになつて、愈々山あひの生活は顧みられぬことになつたが、是は信州のやうな國では随分と損なことである。碓氷や蒜神は日本武皇子の昔から、既に一國の幹線であつた如く傳へられるが、豫ねて堺の人々が踏みあけた徑が無かつたら、誰がこの山奥に貴人を導いて來よう。乃ち彼等の探險は又一時代古いといふことになるのである。しかも世に隠れてつひ此頃まで、この息づきは尙續いて居た。信州四邊の村々はどこへ行つても、必ず嶺一つ隔てた鄰縣の民が、若干は來てまじり住んで居る。人は此事實を見て信州が海に遠く、遅れて拓かれた國だからと想像するかも知らぬが、それは少しでも宛てになる話でない。山の向ふへ此方からも出て居る者が、有るやら無いやらが知られては居ないからである。高きに登つて國見をした古への世ならば、大體に堺の兩側の平野の多少が、人の流れの水筋をきめたであらうが、後々希望と長處との複雑な差等

が現はれると、進路は互ひに行きちがつたかも知れぬのである。其上に人には未知の世界をゆかしがり、新たに身の力を試みようとする夢があつた。始めて戸を敲いた者が何方だつたかは別として、開けば必ず兩方で、之を使はずには居なかつたと思ふ。しかも渡り鳥の習性にも見られるやうに、越えて直ちに麓の野に足を休め、そこに新たな止住の地を求めるか、或は又長い旅路を續けて、なほ次々の機会を比べて行くかは、個々の地形により、且つ移動者の素質能力によつて、方面毎にそれ々に異なる結果を見たやうだが、信州は大體に出る者が遠く行き、入つて来る者が近く留まる傾きがあつた爲に、愈々外部からの感化ばかりに、搖蕩せられて居たかの如き印象を與へるのかも知れない。

或種の習俗慣行や言語藝術、それを裏打して居る信仰なり自然觀なりが、遠近ほんの僅かづゝの變化を以て、弘く日本の端々までの一致を見るといふことは、文化史の學徒としては輕視すべき小事でない。是をたゞ簡單に等しく日本民族であるが故に、同じものを持つて居るのだと説明しようとする、曾て我々の祖先が中央の一箇處に、小さな社會を爲

して群がつて居た頃から、それがあつたといふことを認めなければならぬ。しかも必要の多くは後になつて、新たに生じて居るのである。今は埋もれきつて居る數十の峠路の交通以外に、この傳播を迹づけるものゝ無いことは明かだが、それも境外から移し入れたものばかりだとすると、信州の古人は白紙の生活をして居たか、但しは又悉く固有のものを、忘れ擲つて顧みなかつたといふことになるのである。さういふことは兩つながら有り得ない。だから今あるさまざまの生活様式の、國の隅々と共通して居るものゝ中には、多くの學んだものと若干の教へたものが、入りまじつて併び存して居るのである。遠い將來に向つて何を與へ、何を取るべきかを考へなければならぬ人たちが、歴史はどうなつて居るかを知つて置かうとしなかつたのは、恐らく其方法が無いと思つた、素朴なるあきらめからであらう。確乎不拔とまでは言はれぬかも知らぬが、方法はともかくも既に立つて居るのである。即ち限りある書傳の文字を離れて、直接に生活の様相の上に、遣り留まつて居る前代の姿を味はひ又知ることがそれであつて、其爲には國人の理解がまさに熟して居る

のみならず、交詢比較の機關も亦ほゞ備はつて居るのである。山の彼方にも又其向ふにも郷土の研究があり痛切なる郷土の疑問があつて、互ひに他の一方に在るものが答であることとを、知らずに居る場合がまだ多いかと思はれる。汽車は附近の山路の若干を無用にしたらけれども、知識の交通は此爲に更に更に繁くなつた。だから一日も早くこの一方の無形の峠に攀ち登つて、眉に手を翳して遙々と國見をすることが出来るならば信州の文化は再び復、大いなる前途を約束せられるであらう。

(昭和十一年八月)

索引

奥民圖彙	一八九	アラミタマ	二〇三
相生集	一九	粟穂、稗穂	二〇二
縣 巫	七	幽 靈	二〇
秋田風俗問狀答書	五	異郷の産物	二五
安藝國昔話集	三九	市神様	二九
安居院神道集	九	移住神	二八
阿且の實	一七	イヌグス	四
天稚彦物語	三三	犬と羽衣の關係	三三
アマノジャク	二四	祈り釘	一〇一
争ひの樹	六	猪・鹿・狸	三三
索引			二八九

家筋
因伯昔話

ウ

丑の時参り

散米(ウチマキ)

上指の箭

瓜子姫

オ

大田南畝

オシナ

御頭左宮司

御頭の木

オト神様

モ、ミ

ミ

オドレの木

御松迎

オネンブリ

音頭踊

音頭だし

カ

一〇、二〇

ミ

改元紀行

甲賀の三郎

カガチ

鍵掛の風習

甲斐國誌

謙堂日歴

蛙のおとむらひ

鎌を崇敬

二九〇
二九一
二九二
二九三
二九四
二九五
二九六
二九七
二九八
二九九
三〇〇

九、一〇、一一

一三

一五

一七

一九

二一

二三

二五

神様松

神降し行事

神送り

神依木

刈掛け

竿燈

神主の葬風

キ

紀伊續風土紀

紀州植物誌

桔梗

木曾路名所圖會

狐狩り

共古隨筆

索引

切子

ク

クスリ

頸城三郡志料

願果し

ケ・ゲ

見物左衛門

源五郎話

コ

小泉小太郎

後生花(ゴシヨーパーナ)

後法興院日記

二九一
二九二
二九三
二九四
二九五
二九六
二九七
二九八
二九九
三〇〇

二九一
二九二
二九三
二九四
二九五
二九六
二九七
二九八
二九九
三〇〇

二九一
二九二
二九三
二九四
二九五
二九六
二九七
二九八
二九九
三〇〇

二九一
二九二
二九三
二九四
二九五
二九六
二九七
二九八
二九九
三〇〇

索引

御靈會

二〇四

七月七日

二九二
一六、三一、三七

サ

酒盛り歌

二五

枝垂櫻

四、七

逆さ杉

三

シドメ

一六

境論

八

信濃柿

一

サガ流し

二〇〇

信濃巫

六、二

サキヤマ

四三、四四

下總國式社考

四

猿の言葉

三七

正月七日

一〇〇、一〇六

三階松

三七

精靈が樹による

一六、三〇

山神祭

四、七

上代教育法

三

シ

習俗の起り

二、一八

信仰の分化

三〇六

神領

二

神木の成長

三

神ノ宮

四

信府統記

八

ス

諏訪大明神

七、八

田村將軍

一五

駿國雜志

元

七夕の由來

三六

セ・ゼ

世間話

三九、四〇

旅狼

二〇〇

善光寺

三

千曲之眞砂

一九

タ

大日本老樹名木誌

三

地名と傳説

七、一七

峠の神

三〇

津輕ムガシヨ集

三六

太宰管内志

一〇三

ツクテバ

一六

蓼科山

一〇

テ・テ

三

タブの木(イヌグス)

五

庭園藝術

四

索引

二九三

朝鮮民譚集

三〇

天狗の木
出稼労働者
傳説の種類
傳説の昔話
傳説の下伊那
傳説と歴史
傳説の發生
傳説の變化

三

ト

頭屋
頭屋の徽章
頭の選定
常世の國
年占

三 利根川圖誌
六 鳥追ひ
二五 トンド
一三 内鎌
一三 ナイガマ様
一八 薙鎌の神事
名無し木
七日盆
二 なんぢやもんぢやの木
一六、二六 庭踊

ナ

二 二郡見聞私記
庭踊

四 一七
三六 一七
一七 七
二〇 三、五、六
七

接骨木
如竹上人
人形ネブタ

ヌ

勝軍木

ネ

捻れ木

ノ

能登國名跡志
農作の制止
ノノウ

一三 羽衣説話
一〇 鼻唄
一六 玫瑰の實
一七 火祭
三 百萬
三 斐太后風土記
二 二ツバタゴ
二 七 ヨウの木
七 文化傳播

ハ

羽衣説話
鼻唄
玫瑰の實

ヒ

フ

火祭
百萬
斐太后風土記
二ツバタゴ
ヨウの木
文化傳播

三 三
一七 三
二 三
七 三
一七 三

へ

ペニ
へビムカジ

ホ・ボ

ほんたうの踊

ボツカ

本草啓蒙

酸漿

盆

マ

埋葬地

盲人

一八七、一八九

牧の朝露
牧の冬枯

マメ

マトヒ燈

ミ

みならぬ木

民間文藝

民間曆法

民族心理

民謡と女性

九、三七
三三

一六

三三

三五

ム

昔話の分布状態

虫切鎌

三三
六

虫封じ

棟上祭

無名指

ヌ

夫婦松

盲山番

命名行爲の法則

モ

土鼠打

モノ

物草太郎

紋所

六

一〇九

五

三

二七

五

一七

四

一〇

七

ヤ

山姥の舞

矢立の神事

矢立峠

家立茶屋

寄生木

矢の根

山の話の零落

野獣の社會

ユ

弓祈禱

エ

一三

一〇五

一三

一九

六

一六

三九

四三

一〇

索引

越中舊事記

三

夜の挨拶

ヨ

一四

男話

ヲ

三五

流行唄

リ

二五

踊り歌

三五、三六

輪廻思想

ロ

一七

踊子の興味

三六

六月朔日

ワ

一七

踊子の年齢

三六

わざおぎ

二〇

三六

三七

三七

三七

三七

本書の原本は山村書院昭和十一年十月五日
発行「信州隨筆」初版を使用した。但し「信
濃櫻の話」一篇と索引は新たに加へた。

刊行の言葉

こゝに柳田國男先生著作集を世に送るにあつて一言刊行の趣旨を述べて置く。日本に民俗學の研究が興つて以來四十年、先生はこの學問の樹立者指導者として或は著述に或は講演に、又直接門下の教導に寧日なき有様であつた。加ふるに民俗探訪の足跡は全國に遍く、山間の僻村洋上の離島に至るまでその見聞の精涉誠に掌を指すが如くである。民俗學の研究に志す者はもとより本邦文化史に思ひを寄する者、先づ先生の業績をたづねるは今日の常識である。然るに先生の論文著作はその數頗る多く而も容易に入手し難い。我等これを遺憾とし先生に乞うてその代表作をまとめて一望の下に公けにせんとす。幸ひに先生にはこの計畫を賛せられ此處に刊行の運びとなつたことを喜びとする。本著作集に所載はれたる問題は廣範にして多岐、盡く在來史學の空白として殘されし分野に研究の歩を進め獨創の見を立てられたるものである。衣食住、村落と家、冠婚葬祭、國民信仰、年中行事、婦人の生活口承文藝、國語問題などいづれもその豊富なる資料を全國に互る比較研究の下に來たし、ことさらに斷定を避けてこれを將來の研究に俟たれてゐる。我が日本の歴史が新らしき展開を告げんとするに際して我々は先づ常民の歴史を尋ねその將來の動向を決定せねばならない。學問の自由と率直なる批判の許されたる今日凡ゆる研究が精確なる事實の認識を出發點とせねばならない。この意味に於て本著作集の持つ意義は多言を要せざる處である。江湖の精讀を希望する次第である。たゞ現下出版界の惡條件は到底これを我々の理想とする形式の下に出版するを許さず、可能なる限りの努力を以て満足するの外なきことである。讀者これを諒とせられたい。終りに臨み本計畫に援助を惜まざりし出版社各位に對し深甚の謝意を表するものである。(昭和二十二年三月 柳田國男先生著作集刊行會)

柳田國男先生著作集 第三冊

昭和二十三年二月一日發行

定價 百圓

信州隨筆

著者 柳田國男

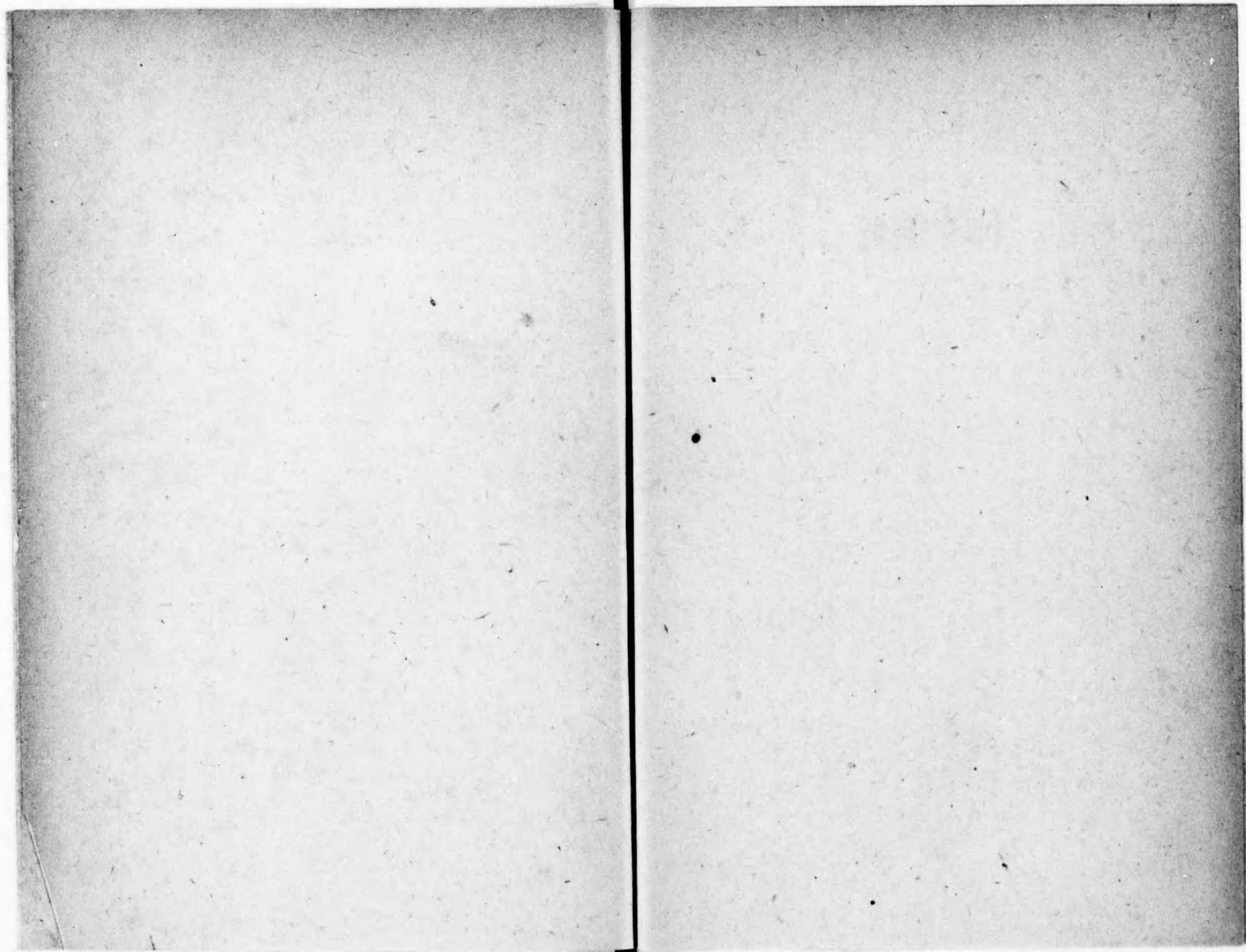
發行者 梅山 紘

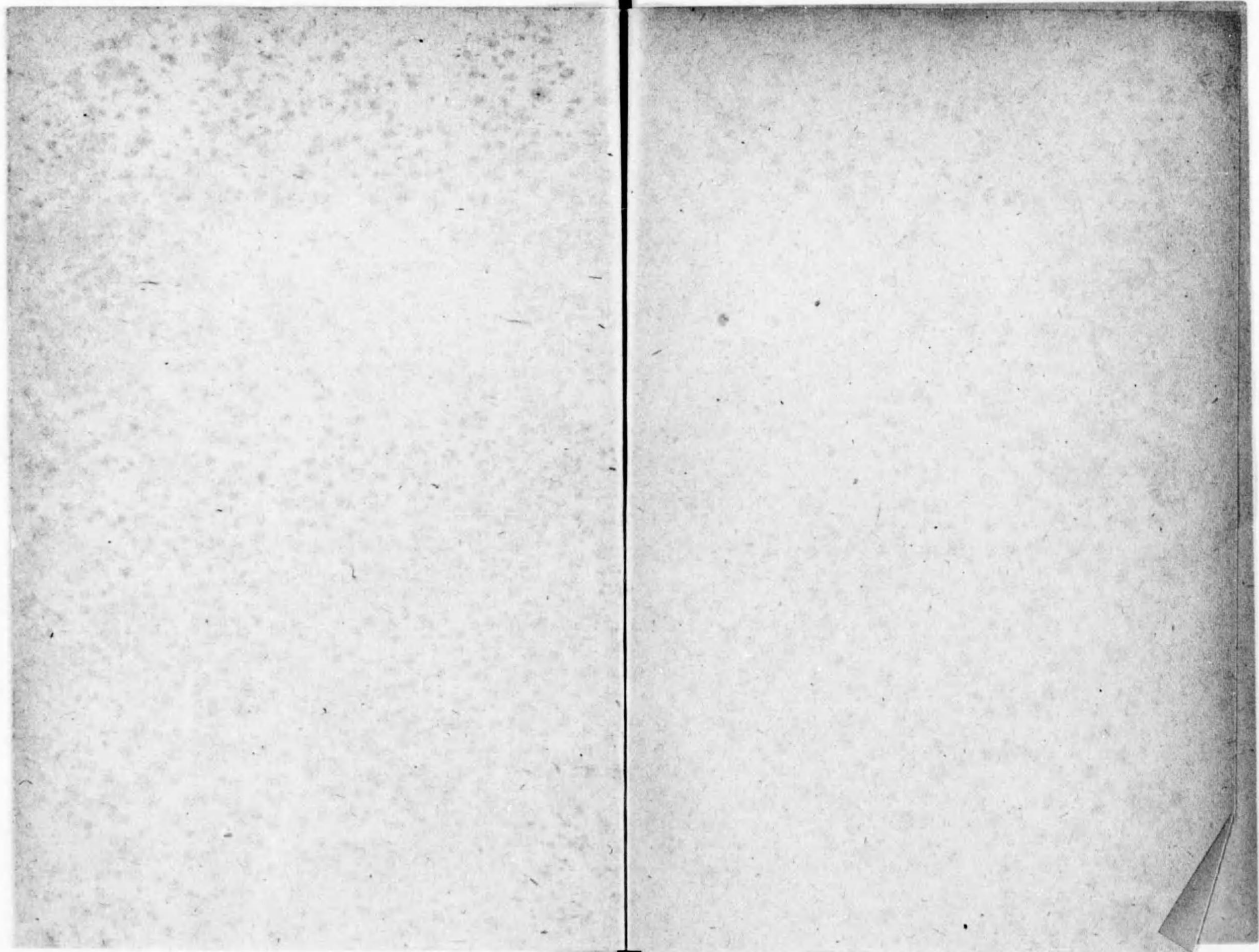
發行者 實業之日本社

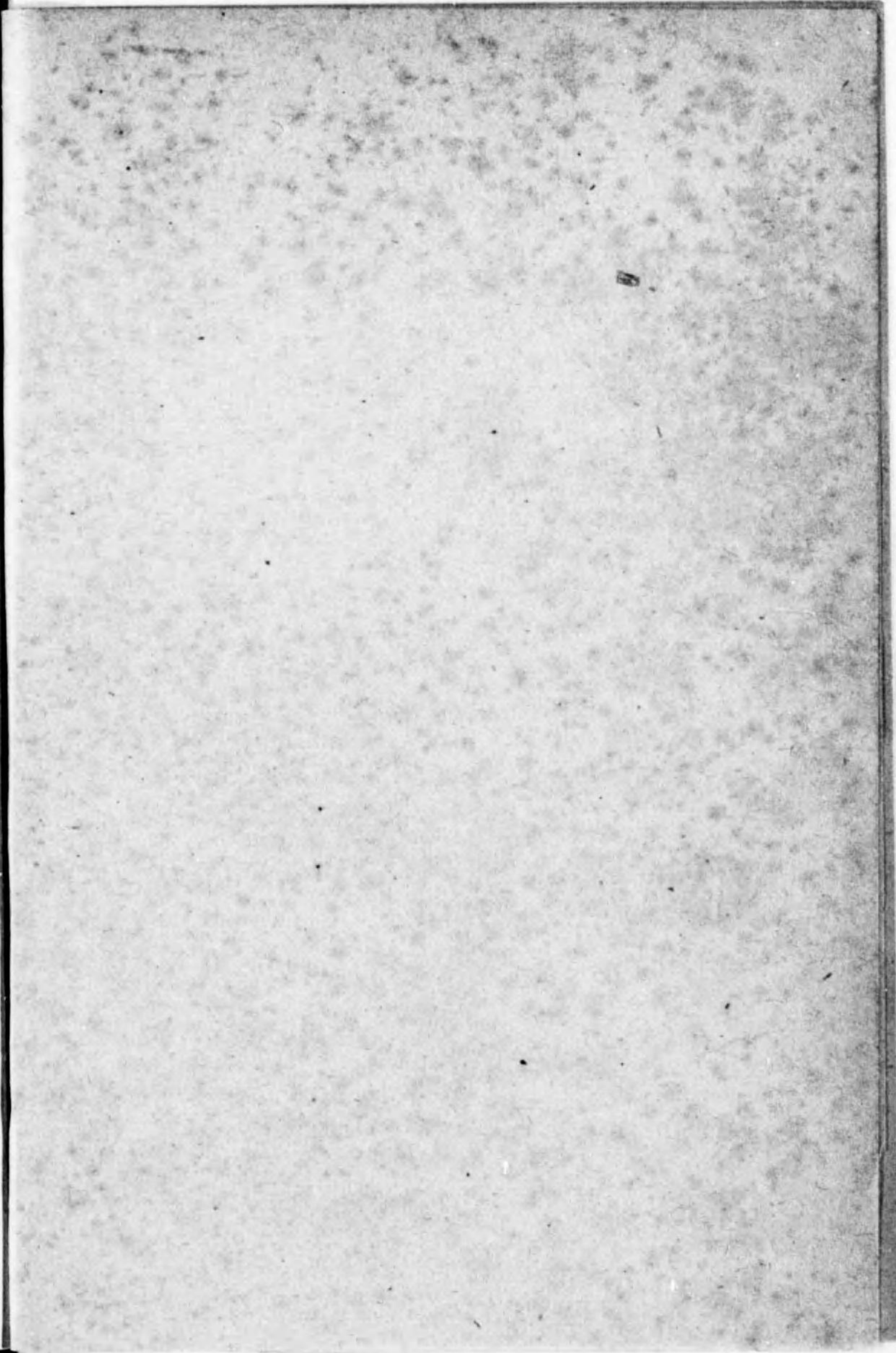
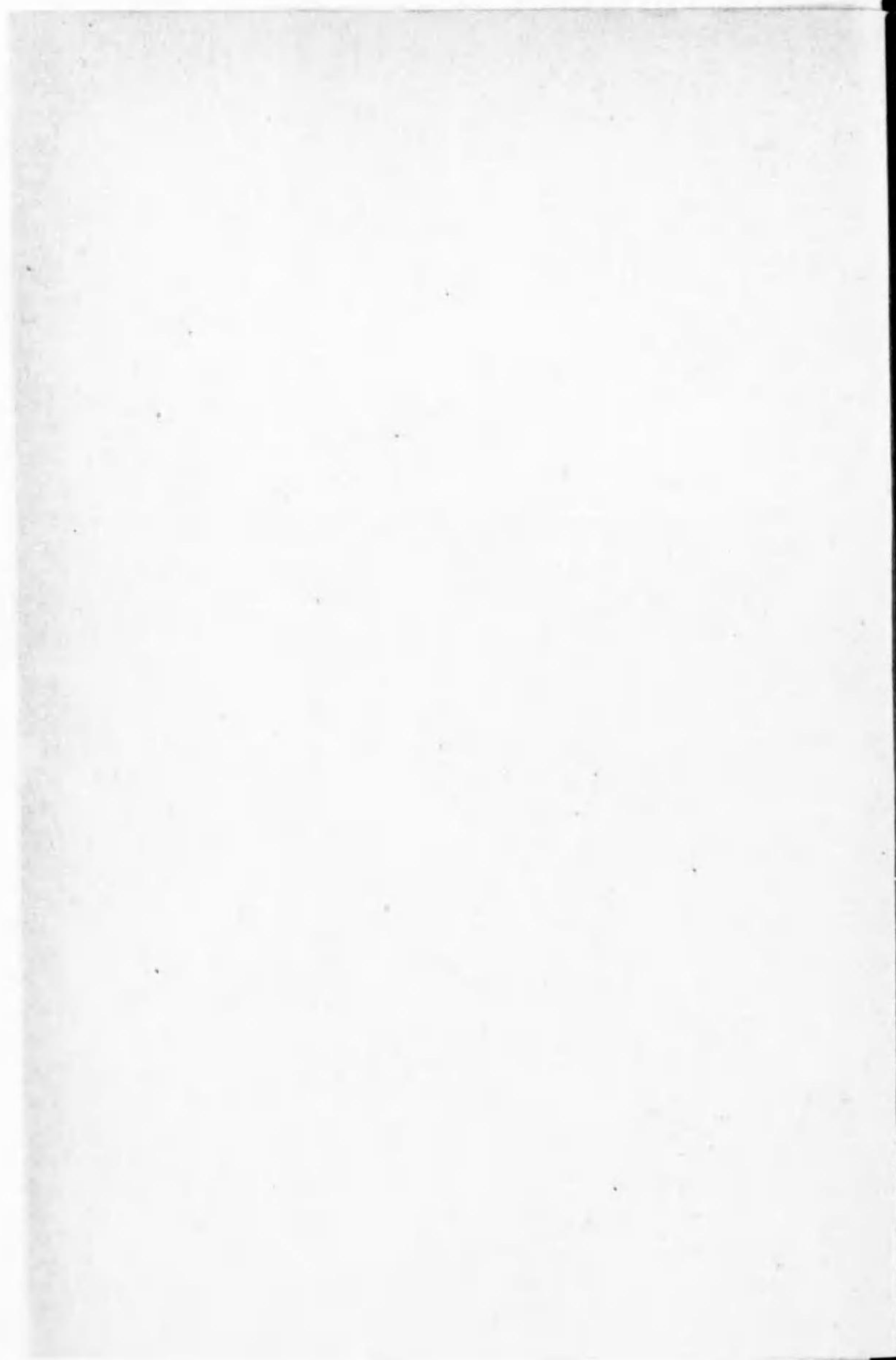
東京都中央区銀座西一ノ三
 電話京橋 五一二二一五
 振替東京 三二二六
 會員番號 A 一〇〇八

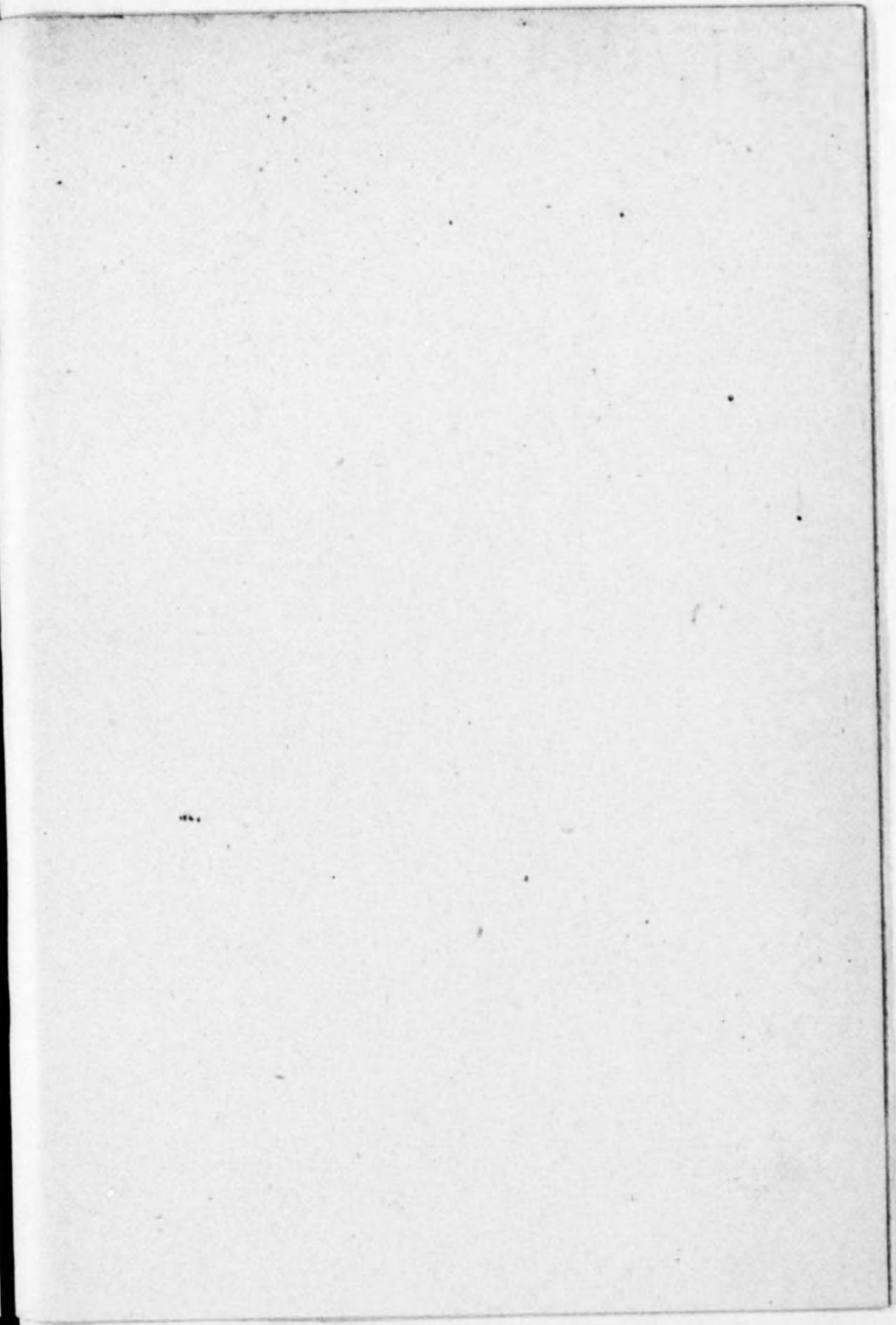
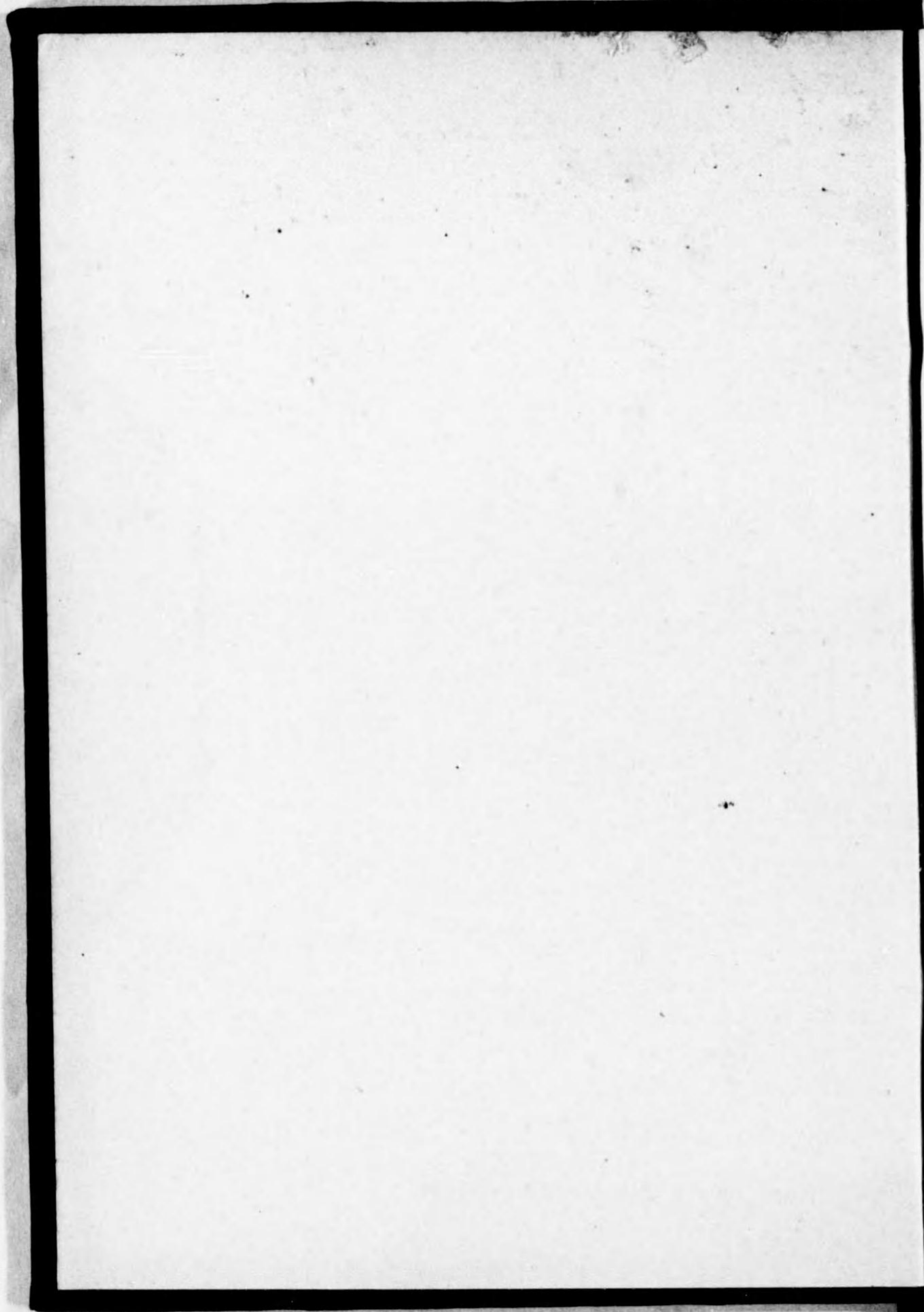


印刷所 大日本印刷株式會社
 表紙 小倉印刷所
 製本所 小原製本所
 配給元 日本出版配給株式會社









終